

Newsletter

No. 11 September 2013

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

11 de Septiembre (9月11日)

9月11日といえば2001年、世界を震撼させた米国におけるテロルが思い出されますが、チリでは別の記念日として国民の心に刻まれています。1970年、チリ大統領選挙により、サルバドル・アジェンデ氏を首班とする社会主義政権が誕生しました。民主的選挙により社会主義政権が成立したのは世界で初めてのことでした。アジェンデ政権は国有化政策等の大胆な改革を断行しましたが経済は安定せず、また東西冷戦を背景に社会主義政権を敵視する米国の工作により社会的混乱が引き起こされました。1973年9月11日、米国CIAの支援を受けたピノチェト将軍らの軍事評議会がクーデターを起こし大統領府であるモネダ宮殿を攻撃、降伏を拒否したアジェンデ大統領は自害しました。チリはその後16年にわたり軍政下におかれ、弾圧や虐殺が繰り返される時代を送ることになります。

自国民による民主的な政権選択は、たとえそれがポピュリズムであれオクロクラシーであれ尊重されるべきですが同時にその結果は選択した国民自身の責任に帰するでしょう。結果を見届けることなく他国の介入により厳しい社会的状況におかれてしまったチリの歴史は、残念ながら昨今の世界情勢の中でも繰り返されているように思われます。

ニュースレター第11号では、8月に行われたTMDUチリ・エクアドル派遣団の活動を中心に、LACRCの活動をお届けいたします。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野



アジェンデ元大統領(左)とピノチェト元将軍(右) (Wikipediaより)



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENECの進捗状況	2
TMDU派遣団の活動報告	3

PRENECの進捗状況

LACRCのメインミッションであるPRENECの最新情報をご報告いたします。チリの各地に広がりつつあるPRENECの一環として、本年8月12日にサンティアゴ・国立サン・ボルハ病院で内視鏡検査がスタートしました。サン・ボルハ病院では、LACRCの岡田助教がPRENECの大腸内視鏡検査に携っており、実際の内視鏡検査の担当や、現地医師への指導を行っています。

第2回チリPRENEC講習会を開催

PRENECプロジェクトのリーダーであるCLC大腸肛門科ロペス医師の主催により、第2回チリPRENEC講習会が本年8月16日にCLCにて開催されました。LACRCからは河内講師、岡田助教が講師として参加しました。

本講習会にはチリ国内（第2州のアントファガスタ、第4州のコキンボ、第5州のバルパライソ、第10州のオソルノ、第12州のプンタ・アレナス、第8州（首都州）サンティアゴ）より計55名の消化器科・大腸肛門科・病理の医師や看護師等が参加し、現在プンタ・アレナス及びバルパライソにて実施中であるプロジェクトの経過報告や問題点に関する意見交換、新規参加に必要な設備や運営方法、標準プロトコルの説明、質疑応答等が行われました。

本講習会によりPRENECの新規参加が促進され、チリ国内におけるネットワークがさらに広がることが期待されます。

LACRCは今後もチリ国内におけるPRENECの進展に協力して参ります。



講習会参加者とCLC・TMDUスタッフとの記念撮影



岡田助教によるプレゼンテーションの様子



PRENEC講習会に参加する病理医たち

TMDU派遣団の活動報告

本学の大山喬史学長、杉原健一教授(腫瘍外科学分野)、河野辰幸教授(食道・一般外科学分野)、江石義信教授(人体病理学分野)、大久保憲一教授(呼吸器外科学分野)、吉田丘特任教授(国際交流センター)、近藤弘総務部長、下田弘二企画・経営掛長からなる派遣団が、8月17日から29日まで、チリのサンティアゴ、オソルノ、バルパライソ及びエクアドルのキトを訪問しました。

今回の訪問では、現在進行中のチリ・エクアドルにおける早期大腸癌診断・治療に関する活動のほか、チリ大学と共同で設置するジョイントディグリープログラム構想や、チリ・アウストラル大学との協定、またエクアドル中央大学との協定のための意見交換など、学術的な面でも多くの成果が得られました。

また、今回はCLCの呼吸器外科医であるクラベロ医師の要請で呼吸器外科の大久保憲一教授が参加し、CLCやチリ大学医学部附属病院を訪問し、チリで急増中の肺癌診療に対する現状視察や日本の肺癌治療に関する講演を行いました。

国際シンポジウムENDOSURへの参加

SANTIAGO - CHILE | 19 AL 21 DE AGOSTO 2013 | MARRIOTT HOTEL

II SIMPOSIO LATINOAMERICANO ENDOSUR

Dirigido a: Gastroenterólogos, Cirujanos, Coloproctólogos, Oncólogos, Internistas, Medicina familiar, Patólogos



Enfermedades del aparato digestivo alto

Enfermedades coloproctológicas

Cirugía bariátrica y metabólica

本学がチリ側と共同で毎年実施してきた消化管疾患に関する国際シンポジウム「ENDOSUR」が本年も8月19日から21日までの3日間にわたって開催されました。今回は日本を始め、米国や欧州から21名の医師が演者として招かれ、消化管疾患に関する講演や最新の研究発表を行いました。本学では派遣団から杉原教授、河野教授、江石教授の3名及び、LACRCの河内講師、岡田助教の2名が演者として参加しました。また日本からは国立がん研究センターより斎藤豊医師、小田一郎医師も招かれ、最先端の内視鏡診断、治療技術を披露しました。同時に開催されたワークショップではチリにおけるPRENECの取り組みを紹介するとともに、国内外にPRENECへの参加を呼びかけました。



河野教授による講演の様子



シンポジウム会場にて

TMDU派遣団によるオソルノ市訪問

2013年8月21日から22日にかけてPRENECへの参加を表明しているオソルノ市を訪問しました。

オソルノ市はサンティアゴから800km南に下ったチリ中南部第10州に位置する人口約16万人の都市で、チリ富士と呼ばれるオソルノ火山や牛肉の産地として知られています。今回はこの地域の中核病院の一つで拠点病院となる予定のサン・ホセ・デ・オソルノ病院を訪問し、PRENEC実施予定の施設、設備を視察しました。また同病院は、第10州バルディビアに拠点を置くアウストラル大学医学部の附属病院としても機能しており、オソルノ市内にも同大学のキャンパスが置かれています。今回は、アウストラル大学オソルノキャンパスへも訪問し、今後の学術的提携の可能性等についての協議が行われました。



美しいオソルノ火山 (<http://soloenchile.tumblr.com>)



地元メディアの取材を受ける大山学長ら



内視鏡センター改装式典にて



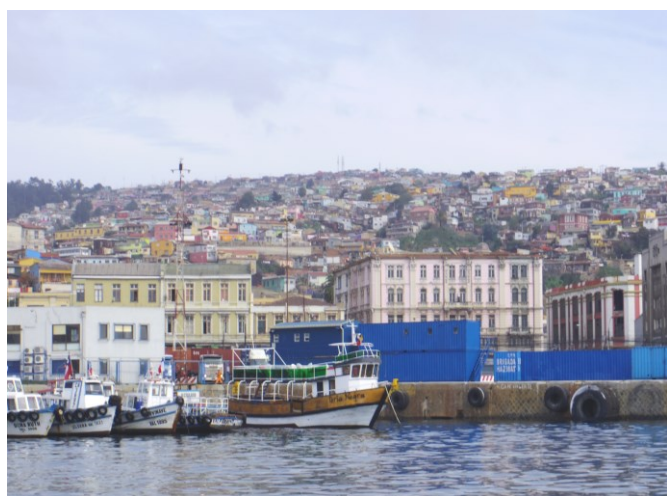
アウストラル大学・グロブ医師と

バルパライソでの拠点となる新内視鏡センター開所式

チリ第5州の都市バルパライソはPRENEC参加都市の一つですが、これまで基幹病院のエドアルド・ペレイラ病院の内視鏡センターは大幅な改装を行っていたため、内視鏡検査は対象者を移送しCLCで施行されていました。

改装終了と新内視鏡センターの始動に伴い、8月23日にセンター開所式が執り行われ、本学訪問団とLACRCスタッフが出席致しました。これまでもバルパライソのPRENECにはLACRCスタッフが積極的に参加しており、引き続き協力を続けていくことを表明致しました。

今後は、更なる検査数の増加とプロジェクトの効率化が期待されます。



歴史ある港町バルパライソ



エドアルド・ペレイラ病院にて



内視鏡センター開所式典における大山学長のスピーチの様子



新しい内視鏡室にて関係者と

チリ保健省・JICAチリ支所訪問

チリ保健省を訪問し、マニャリッチ保健大臣と会談しました。マニャリッチ氏は、2009年に本学が保健省・CLCと三者協定を結んだ当時、CLCの院長職にあり、以後保健大臣に就任したのちも、本学のチリにおける活動を強く支援してきました。今回の訪問では、大山庄長から本学の活動報告等を行いました。マニャリッチ氏は、今までの本学の活動に対する感謝と、今後の継続した支援を表明されました。また、JICAチリ支所を訪問し、チリにおける活動報告及び、今後の展望を話し合いました。



マニャリッチ保健大臣と大山庄長



JICAチリ支所訪問の様子

チリ大学とのジョイントディグリーコース開設に関する協議

本学では、チリにおける大腸癌スクリーニング分野に対する協力・支援の実績を基にした人材育成の一環として、チリ大学医学部及びCLCと共同で運営する大学院ジョイント・ディグリー・コースの設立を検討しています。

今回のチリ訪問では、チリ大学医学部及びCLCに対し、本構想の説明及び提案を行いました。本コースの開設については、チリ大学及びCLC側からも理解が得られ、実現に向けた基本的な合意を取り付けるとともに、本学及びチリ大学の各メンバーから構成される準備委員会を設置して検討を行うこととなりました。

CLCは、私立病院でありながらもチリ大学のクリニカルキャンパスとしての機能も担っており、基礎研究にも力を入れています。CLCのグレベCEOやテヒアス院長から、今後本コースがスタートするまでに、大学院生やLACRC教員が研究活動を行うための十分なスペースや設備を整備していく意向も示されました。計画の進展を期待をもって見守りたいと思います。



チリ大学医学部にて

第2回キト国際消化器癌シンポジウムへの参加

8月26日に、エクアドルの首都キトで行われた国際消化器癌シンポジウムに本学派遣団及びLACRCスタッフが講師として参加しました。このシンポジウムはエクアドル保健省・エクアドル病理学会の共催及び本学の後援によるもので、昨年に続き2回目の開催となりました。

派遣団からは杉原教授、大久保教授、江石教授の3名が、またLACRCスタッフからは河内講師、岡田助教、小林助教の3名が、消化器癌の予防・診断・治療に関する最新の知見を日本及び本学独自の観点から発表し、参加者から大きな注目を集めました。質疑応答のみならず講演の合間、終了後も活発な議論が交わされ、日本とエクアドルの医療関係者の学術的親交を深めることとなりました。

シンポジウムには、在エクアドル日本国大使館から小瀧大使もご臨席され、本学のエクアドルにおける活動についてご理解とご声援を賜りました。



開会式における大山庄長のスピーチ



杉原教授による講演の様子



大久保教授による講演の様子



討論にてチリにおけるプロジェクトの結果を説明する河内講師

大使公邸晩餐会・保健省・スアレス病院訪問

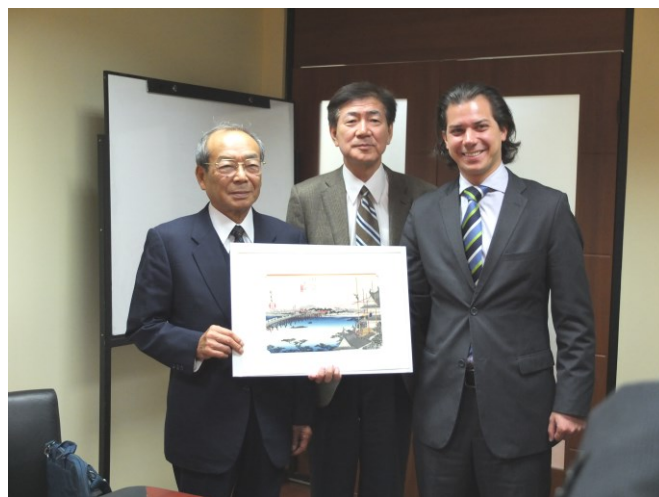
8月26日夕刻、在エクアドル日本国大使公邸での訪問団歓迎晩餐会にご招待頂きました。晩餐会前にモンタルボ医師らとともに小瀧大使と会談を行い、大山庄長からチリにおける活動状況及びエクアドルにおける大腸癌スクリーニング普及の取り組みを説明しました。大使からは、TMDUの活動を今後もご支援頂ける旨の回答を頂戴しました。

8月27日、エクアドル保健省をモンタルボ医師とともに訪問し、エマヌエーレ国際協力課長と面会しました。同国における大腸癌スクリーニングに対するTMDU及びLACRCの支援状況をご説明し、今後もエクアドル保健省とTMDUが協力し大腸癌スクリーニングを進めていく方針を確認することができました。

さらに、エクアドルの大腸癌スクリーニングの拠点病院であるパブロ・アルトゥロ・スアレス病院を訪問し、病理部、内視鏡室、臨床検査部門等を視察致しました。プロジェクト拡大に向けて、意見交換を行いました。



在エクアドル日本国大使公邸晩餐会にて小瀧大使(前列左から2番目)らと



エクアドル保健省・エマヌエーレ国際協力課長に記念品を贈呈



キトにおける大腸癌検診プログラム促進ポスター(右:モンタルボ医師)



プロジェクト拠点であるパブロ・アルトゥロ・スアレス病院訪問

エクアドル大統領との面会が実現

休日の8月25日には、パブロ・アルトゥロ・スアレス病院の医師達のご招待により、キトから車で約1時間30分の温泉施設パパジャクタを訪れました。温泉では、静養中のラファエロ・コレア エクアドル大統領と面会することができ、エクアドルにおける大腸癌スクリーニングの取り組み状況などを説明する機会を得ることができました。



談笑するコレア大統領と大山学長



コレア大統領と記念撮影



パパジャクタ温泉



パパジャクタ温泉近傍の山岳地帯。標高は4000m近い。

編集後記

9月と言えば、チリ全国においても独立記念日の祝賀行事が行われ、皆大型連休を満喫します。しかし、休暇は永遠には続かないもので、最終的に怠惰な自己に打ち勝って、仕事に戻らなければいけません。来月には本学の学生がチリに到着する予定なので、LACRC一同、大変楽しみにしております。今後もニュースレターに関して、皆様からご意見・ご要望等がございましたら、お気軽にLACRCオフィスまでご連絡くださいませ。(ウレホラ・ハイメ)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 11, September 2013

【発行日】2013年9月30日
【制作】Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: jurrejola@clc.cl

Newsletter

No. 12 December 2013

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

Bachata en Fukuoka (福岡でバチャータ)

ここチリでは、私は毎日自家用車で通勤していますが、道中はいつもチリのFMラジオ局をつけております。新旧様々な音楽が流れますが、当然その多くはスペイン語で歌われています。時々気に入った曲があると、スマートフォンで曲名や歌手名を調べています(本当に便利になったものです)。スペイン語の曲と言っても、チリの音楽家の曲はむしろ少なく、スペインやメキシコ、コロンビアなど様々なスペイン語圏の曲が親しまれています。

ある日、調子の良いスペイン語の曲が流れていた時、突然「フクオカ」「アリガトウゴザイマス」などの言葉が聞こえて来るではありませんか。「何だ何だ?」と思い調べて見ると、ドミニカ共和国出身のJuan Luis Guerraという男性歌手が歌う、“Bachata en Fukuoka”という曲でした。歌詞を調べて見ると、福岡の女性との思い出を歌ったものでした。この曲は3年程前にリリースされ、日本の新聞にも取り上げられ話題になりました(Juanが福岡公演を行った際の温かいもてなしに感激して書き上げた曲だそうです)。Bachataとはドミニカ発祥のとてもロマンチックなダンス音楽。私はそれまで知りませんでしたが、いまでは好きな音楽ジャンルのひとつです。このような新しい発見もチリ暮らしでのささやかな楽しみです。

LACRCニュースレター第12号では、メインプロジェクトである大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の進捗状況を中心に、LACRCの活動をお伝え致します。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野



Juan Luis Guerra



“Bachata en Fukuoka”



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

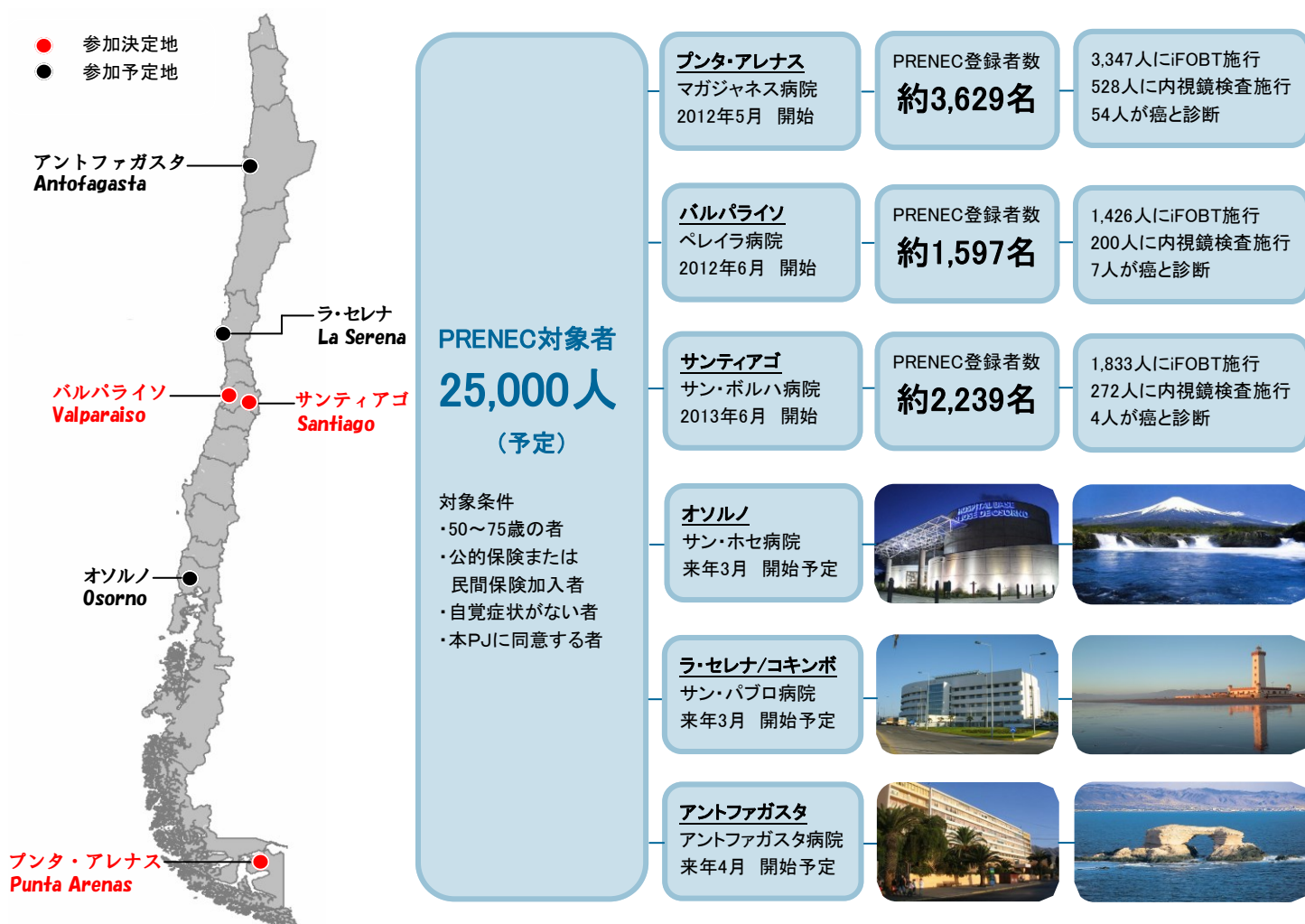
ご挨拶	1
PRENECの進捗状況.....	2
プロジェクトセメスター.....	6
活動報告	7

PRENECの進捗状況

LACRCのメインミッションであるPRENECの最新情報をご報告いたします。このプロジェクトは、第5州のバルパライソ、第12州のプンタ・アレナスにおいて、それぞれ年間3,000人、首都州サンティアゴにおいて10,000人を対象とした免疫学的便潜血反応検査（以下、iFOBT）が計画されています。

チリでのPRENECの進捗報告

現在のPRENECは、プンタアレナス、バルパライソ、サンティアゴの3都市で進行中です。当初の計画よりも開始が遅れながらも、プンタ・アレナスを中心に着実に成果が得られつつあります。プンタ・アレナスにおいては、現在までに54名の参加者に癌が見つかり、そのうちの8割が早期癌となっています。マガジャネス州は、チリでも大腸癌の発生率が高い地域として知られていましたが、そのことを裏付ける大変興味深い結果となっています。また2014年には新たに3都市でPRENECが始まる見込みです（下図）。



第2回PRENEC国際コースを開催

本年9月27日には、第2回PRENEC国際コース（Segundo Curso Internacional PRENEC）が開催され、LACRC河内講師及びロペス医師をはじめとするCLC大腸肛門科のスタッフが講師として出席しました。

本コースは、チリ以外のラテンアメリカ諸国を対象に、PRENECの運営方法やプロトコル紹介、内視鏡や病理等の分野ごとのレクチャーを行うことにより、PRENECへの参加を促進することを目的としています。

今回は富士フィルム・栄研化学の支援の下、ブラジルの4病院から計9名の消化器科・大腸肛門科医師や看護師が参加しました。ブラジルではPRENEC参加を目指してその準備段階であるパイロットプロジェクトがまもなく開始される見込みとなっており、他のラテンアメリカ諸国におけるネットワークがさらに広がることが期待されています。



コース参加者とCLC・TMDUスタッフとの記念撮影



ロペス医師によるプレゼンテーションの様子



プレゼンテーションをする河内講師

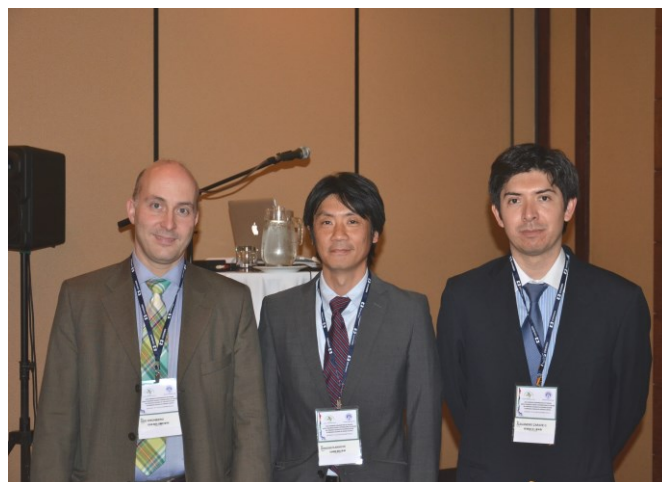


コースの様子

PRENEC成果の発信が始まる

チリにおける早期大腸癌診断プロジェクト(PRENEC)がスタートしてから約1年半が経過しました。これまでにプンタ・アレナスを中心に6,000名以上が参加し、iFOBT陽性者約1,000名に対し内視鏡が施行されており、粘膜内癌を含めると約60名の癌患者が見つかっています。これは受診者の約1.5%に相当しますが、本邦の大腸癌検診における癌発見率の約10倍に相当するきわめて高いものです。さらに特筆すべきはその約8割が早期であるということです。LACRC及びCLC大腸肛門科では、PRENECの様々な成果を学術論文や学会発表の形で内外に発信する計画を進めています。

2013年11月20日にサンティアゴにて開催されたチリ外科学会及び同月27日にプコンで開催されたチリ消化器病学会において、河内講師がプンタ・アレナスにおけるPRENECの病理学的集計結果報告及び早期癌内視鏡切除検体の日本式取り扱い・診断方法を紹介しました。PRENECにおける癌発見率の高さ、早期癌比率の高さ共に聴衆には大きなインパクトがあったようで、発表後にはPRENECへの新規参加を希望するコメントも寄せられました。また日本式の検体評価方法についても多くの興味寄せられ、日本で培われた技術・経験がより広まっていくことが期待されます。



発表後、学会場にてCLCクロンベルグ医師、サラテ医師らと記念撮影

マガジャネス病院病理医の研修を実施

PRENECでは、iFOBT及び内視鏡検査が2つの柱となっていますが、発見された病変の病理診断も大変重要です。LACRCには病理医として河内講師が赴任し、日本の進んだ消化管診断学をチリ人病理医に伝えるべく活動しています。しかし、多くのチリ人病理医は欧米式病理診断のトレーニングを受けており、また欧米への留学経験を持つ医師も少なくありません。日本式と欧米式の間には、早期癌に対する考え方が大きく異なることから、欧米式を学んだ病理医にとって、日本式を取り入れることは容易ではありません。

しかし、日々の症例検討会などにおける地道な活動を通し、日本式に興味を示すようになった病理医も徐々に増えています。PRENECの拠点であるプンタアレナス・マガジャネス病院のデルガド医師もその一人で、今回のマンツーマン研修は彼の希望により実現しました。デルガド医師は2013年12月5日、6日の2日間、LACRCオフィスにて河内講師とともに早期大腸病変の顕微鏡観察を行い、病理診断基準のディスカッションを行ったほか、河内講師からいくつかのショートレクチャーも受けました。デルガド医師は、日本における研修にも興味を示しており、将来PRENECを担う病理医となることが期待されます。



研修の様子。左はマガジャネス病院・デルガド医師。

サン・ボルハ病院での大腸内視鏡トレーニング

チリ国内では大腸内視鏡検査を施行する医師が少なく、大腸癌検診を普及する上での課題の一つとなっております。この状況を改善すべくLACRCは開設当初より保健省、CLCと協議し、PRENEC参加医師育成のための大腸内視鏡トレーニングコース開設を計画して参りました。実際のコース開設は調整に難航し時間を要しましたが、本年10月よりサンティアゴ、サン・ボルハ病院にある日智消化器病研究所でようやく稼働し、研修生の受け入れを開始致しました。コースではLACRCの岡田助教が中心となって指導を行い、PRENECの大腸内視鏡検査に参加可能なレベルに達することを目標としております。指導内容は盲腸到達率と到達時間の改善から、腫瘍の発見、治療、また炎症性疾患の診断など多岐に渡り、特に日本が先駆的に取り組み現在も世界のトップである早期腫瘍の発見と内視鏡治療について重点的に指導を行っています。

現在は、ソテロデルリオ病院よりブリオネス医師が本プログラムの第一期生として研修を受講しています。ブリオネス医師は2013年のENDOSURでLACRCやCLCの医師の発表を聞き感銘を受け、ご自分で応募され受講に至ったとのこと。向学心が強く、内視鏡挿入や診断の技術にはめきめきと上達が見られ、今後の大腸癌検診の一翼を担うことが期待されます。

今後もLACRCスタッフが積極的な協力と提言を行い、更に高度で効率的なトレーニングプログラムの遂行に励んで参ります。



研修中のブリオネス医師と岡田助教

フィニス・テラエ大学にて講演

チリにはチリ大学やカトリカ大学の様な長い歴史を持つ大学医学部がありますが、近年では医学部の新設も行われています。サンティアゴにあるフィニス・テラエ大学は1988年に建築系の学科を中心に設立されました。その後2001年に医学部・歯学部をはじめとする医療系学部・学科が設置されました。チリでは基礎・臨床の別を問わず研究活動に従事する医師の割合が非常に低いことが問題視されており、医学生に対し医学研究の重要性を訴えることが必要と考えられています。

2013年11月8日、フィニス・テラエ大学の要請により、河内講師が講演を行いました。講演では、日本における医師のキャリアパスを紹介し、また医師が自ら研究を行うことの重要性を訴えました。本題以外にも、チリの若い学生に日本をより知ってもらえるよい機会と考え、本学やLACRCの紹介、日智友好の歴史のみならず、日本の近代史、工業製品やサブカルチャー、日本食等の紹介も行いました。



講演の様子

プロジェクトセメスター

プロジェクトセメスターがスタート！

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を約4ヶ月に渡ってチリの研究施設に派遣しており、LACRCでは彼らの研究・生活のサポートも行っています。本年度も10月8日に4名の学生がチリに到着いたしました。このうち3名がCLC、1名がチリ大学の研究室に所属しています。

12月2日には、指導者や関係者を集めて第一回進捗ミーティングが開催され、未だ十分な結果が得られていない段階ながらも研究内容の発表やディスカッションが行われました。

学生達は研究生活のみならずチリ人学生との交流等、貴重な時間を過ごしています。2月上旬の帰国まで、無事に、そして充実した日々を過ごしてくれることを願っています。

次号では派遣学生による滞在記をお届けする予定です。



家坂辰弥によるプレゼンテーションの様子



柳平貢によるプレゼンテーションの様子



川田大介によるプレゼンテーションの様子



吉岡義朗によるプレゼンテーションの様子

活動報告

エクアドル病理学会に参加

2013年10月16日から18日まで、エクアドル・キト・スイスホテルにおいてエクアドル病理学会が開催されました。

LACRCから河内講師が招聘され、大腸鋸歯状ポリープの病理診断に関する講演を行いました。発表の合間には、パブロ・アルトゥロ・スアレス病院に赴き、進行中の早期大腸癌診断プロジェクト進捗状況確認や、病理診断責任者であるヴァカ医師とのディスカッションを行いました。

キトにおける大腸癌検診プロジェクトはエクアドル保健省も高く評価しており、今後保健省主導で他地域・他公立病院にも展開する計画が進められています。



レセプションにて学会世話人らと



発表後、学会場にて日章旗とともに

編集後記

例年12月になると、チリばかりでなく、南米の各地でもクリスマスが盛大に祝われます。また、チリは主にローマ・カトリックの国なので、毎年25日は祝日で、24日も午後からはほとんどの会社や店は仕事を休み、余暇や家庭で家族と過ごすことができます。一方、本学の学生達も10月に到着して以来、徐々にチリ生活にも慣れ、研究や異文化体験を楽しんでいる気がいたします。今後もニュースレターに関して、皆様からご意見・ご質問等がございましたら、お気軽にLACRCオフィスまでご連絡くださいますようお願い申し上げます。(ウレホラ・ハイメ)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 12, December 2013

[発行日] 2013年12月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: jurrejola@clc.cl

Newsletter

No. 13 March 2014

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

南米の日本、チリ

こちらサンティアゴは3月に入ってぐっと秋に近づき、日中はまだ暑さが残るものの朝晩は10度近くまで下がって肌寒さを感じるようになってきました。

日本では「チリ＝常夏」という誤ったイメージを持っている方が多いようですが、首都サンティアゴは南緯33度で東京の北緯とほぼ変わりません。そのためサンティアゴにも四季があり、季節ごとに草木や旬の食材の移り変わりを楽しむことができます。

その他にも日本とチリとの共通点は探してみると意外と多いもので、例えばチリの国民性は勤勉、真面目な人が多く、「南米の日本」と称されることもあります。（日本が勤勉の代名詞のようで、ありがたいお話です。）またチリ人は、南米では珍しくシャイな一面があったりします。一説によるとチリは周囲を海と山に囲まれた地形で陸の孤島ようになっており、島国日本と似ているためとも言われています。

食事の面では海が近いため海産物が豊富に採れます。市場に行くと多くの魚介類が新鮮なまま売られていて、賑わった様子はさながら築地市場のようです。海産物は輸出も盛んで、日本でチリ産サーモンを目にしたことがある方も多いかもしれません。

しかし、共通点で最も忘れてならないのは地震でしょう。日本と同様にチリも長きに渡り地震による被害を受け、悩まされてきた歴史があります。つい先日の3月16日にもチリ北部でマグニチュード6.7の地震があり、幸い大きな被害は出なかったものの、改めて地震大国であることを実感させられました。

日本人にとっては似ている点が多く住みやすいと言われるチリ、もちろん異なる点の方が圧倒的に多く国際協力は困難な道のりではありますが、時にはこんなアイスブレイクも駆使しながら業務に励んでおります。

岡田 卓也 LACRC 食道・一般外科学分野



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENECの進捗状況	2
TMDU派遣団の活動報告	4
プロジェクトセメスター	7

PRENECの進捗状況

既にサンティアゴ、プンタ・アレナス、バルパライソで開始されているPRENECは、LACRCスタッフの積極的な参加により順調に参加者数を増やしています。本年は更に3都市の新規参加が予定され、参加者の増加に備え環境調整を進めております。

第3回PRENEC国際コースを開催

2014年1月10日、ブラジルでの大腸癌検診のパイロットプロジェクト開始のための講習会が開かれ、本学訪問団、LACRCスタッフ、CLC大腸肛門科とブラジル側関係者が参加しました。チリにおける経験をもとに、啓蒙活動、便潜血検査、データの取り扱いなど、具体的な項目に関する講習を行いました。特に便潜血検査については、江石教授が本物のキットを用いて自ら説明を行いました。

両国における大腸癌検診プロジェクトの発展のため、TMDUとチリ、ブラジルで協力体制を継続していくことを確認致しました。



ロペス医師によるプレゼンテーションの様子



コースの様子



便潜血キットの説明をする江石教授



プレゼンテーションをするボンセ看護師(チリPRENECコーディネーター)

コキンボ・オソルノ協定書調印式

PRENECは現在、サンティアゴ、プンタ・アレナス、バルパライソで進行しております。2014年1月13日に、新たにコキンボのサン・パブロ病院、オソルノのサン・ホセ病院が拠点病院として正式にプロジェクトに参加する協定がそれぞれの病院と本学、およびCLC間で締結されました。

調印式には、各病院を所管する州の保健局長、拠点病院長、CLCからは病院長、医師会長、ロベス医師、本学からは江石教授、吉田教授、内田技官、LACRCスタッフが参加し、今後の協力体制について会談致しました。2014年5月よりコキンボでは2年間で3000名、オソルノでは半年で1000名を対象としてPRENECを展開していく予定です。



コキンボ関係者らと



オソルノ関係者らと



コキンボの拠点、サン・パブロ病院



オソルノの拠点、サン・ホセ病院

TMDU派遣団の活動報告

本学の江石義信教授、吉田丘特任教授、内田技官からなる訪問団が、本年1月8日から14日まで、チリ共和国に滞在しました。

今回の訪問では、現在進行中のチリにおける早期大腸癌診断・治療に関する活動や、内田技官らによる現地研究員への技術指導のほか、チリ大学と共同で設置するジョイントディグリープログラム構想や、チリ・アウストラル大学との協定、またCLCとの看護領域研修・肺癌スクリーニングプロジェクトに関する協定など、学術的な面でも多くの成果が得られました。

アウストラル大学との学術協定締結

サンティアゴの約810km南に位置するLos Rios州の州都であるバルディビアは、開拓から492年の歴史を持つ緑豊かな街です。チリにおける水産業の拠点としても知られ、日本からの技術援助の歴史も長く、親日家の多い土地柄としても知られています。またドイツ系移民が多く生活しており、チリを代表するビール「Kunstmann」（写真左下）の生産地としても知られています。バルディビアには、医療系学部を擁するアウストラル大学のメインキャンパスが置かれています。

今回、アウストラル大学の要請により、本学とアウストラル大学との間に学術協定が結ばれることとなりました。本協定により、両大学間での共同研究や本学教官・研究者による技術指導、交換留学制度などが将来的に実現する見込みです。本協定の調印式が、2014年1月13日、サンティアゴ医師会館にて執り行われました。アウストラル大学からは、Cubillos学長、Montt理事長、Flores医学部長らが臨席し、本学からはチリ出張中の江石教授、吉田教授、内田技官およびLACRCスタッフが参加いたしました。また、在チリ日本国大使館より、山口書記官にも御臨席頂きました。

アウストラル大学は、本年PRENECが開始される予定のオソルノ市にもクリニカルキャンパスを持ち、大腸癌早期診断プロジェクトにおいても協力予定ですが、本協定が結ばれたことから、学術研究面においても本学のチリにおける活動がさらに充実することが期待されます。



アウストラル大学Cubillos学長と江石教授



左より吉田教授、江石教授（TMDU）、山口書記官（在チリ日本国大使館）、Cubillos学長、Flores医学部長（アウストラル大学）

在チリ日本国大使館・JICAチリ支所表敬訪問

在チリ日本国大使館およびJICAチリ支所を訪問し、PRENECの進捗状況や、南米各国への今後の展開、ジョイントディグリープログラム構想等の報告を行いました。



在チリ日本国大使館にて村上大使との記念撮影



JICAチリ支所訪問の様子

ジョイントディグリープログラムに関する協議

本学では、チリにおける大腸癌スクリーニング分野に対する協力・支援の実績を基にした人材育成の一環として、チリ大学医学部及びCLCと共同で運営する大学院ジョイントディグリープログラムの設立を検討しています。昨年8月にTMDU訪問団とチリ大学代表団との間で基本的な合意がなされましたが、今回はさらに具体的なカリキュラム作成のための協議が行われました。

本協議により、ジョイントディグリープログラムは2016年度から開始することを目標とすること、消化器内科、消化器外科臨床医を対象とし、2年間の専門的技術トレーニングと3年間の基礎研究を組み合わせた5年間のコースとすること、などが合意されました。今後はさらに具体的なカリキュラム作成や、開始に必要な設備・機器の検討などが進められる予定です。



協議の様子

看護領域研修・肺癌検診プロジェクトに関する協議

チリの平均寿命は男性76歳、女性82歳であり、高齢者の割合が徐々に増加しつつあります。CLC看護部では、高齢者介護体制を充実させることを目標のひとつとしており、同分野で多くの経験を有する日本から高齢者看護・介護を学びたいという希望が示され、本学訪問団とCLC代表団との間で協議が行われました。

今後本学としてどのような協力が可能か関係者と慎重に協議を重ね、将来的にチリの高齢者医療への貢献が実現することが期待されます。

また、チリにおいて大腸癌は増加傾向にあり、本学は早期発見のためのプロジェクトに参加しているところですが、チリ保健省が発表している癌死亡率統計(2011年)では胃癌は男性で第1位、女性は乳癌に続いて第2位、肺癌は男女とも3位です(大腸癌は男性で4位、女性で5位)。大腸癌のみならず、胃癌、肺癌等に対する早期発見システムの確立が求められています。

CLC呼吸器外科のクラベロ医師らは、チリ保健省を通じて公的な肺癌検診プログラムの計画を進めてきましたが、日本の画像診断技術を取り入れたいという強い希望があり、チリにおける肺癌検診

プログラムの実現に向けて、本学および富士フイルムが協力していくことが合意されました。

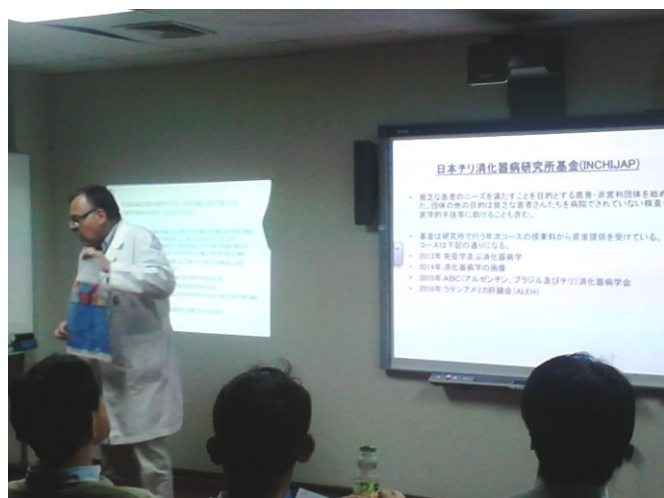


クラベロ医師らとの肺癌検診プロジェクトに関する協議

国立サン・ボルハ・アリアラン病院訪問

2014年1月8日、TMDU派遣団とLACRCスタッフがサン・ボルハ・アリアラン病院を訪問しました。日智消化器病研究所所長のエステラ医師より、長年に渡るTMDUとの協力関係の歴史や近年の同研究所の成果について、日本語の資料を用いたご説明を受けました。また現在のLACRCの活動に対する感謝の意を頂戴しました。

TMDUとサン・ボルハ病院との関係は40年以上に渡り、チリでの胃癌や大腸癌診断技術の向上に貢献して参りました。現在はサンティアゴで展開されているPRENECにおいて、内視鏡検査の基幹病院となっております。今後も双方の発展のため協力関係を維持することを約束致しました。



エステラ医師によるプレゼンテーション

プロジェクトセメスター学生チリ滞在記

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を5カ月間にわたってチリの研究機関へ派遣しており、LACRCでは、彼らの研究・生活のサポートも行っています。昨年10月8日に4名の学生がチリに到着し、うち3名がCLC、1名がチリ大学の研究室に所属しました。学生達は課程を終え、本年2月に無事帰国致しました。本号では、派遣学生のチリ滞在記をお届けいたします。

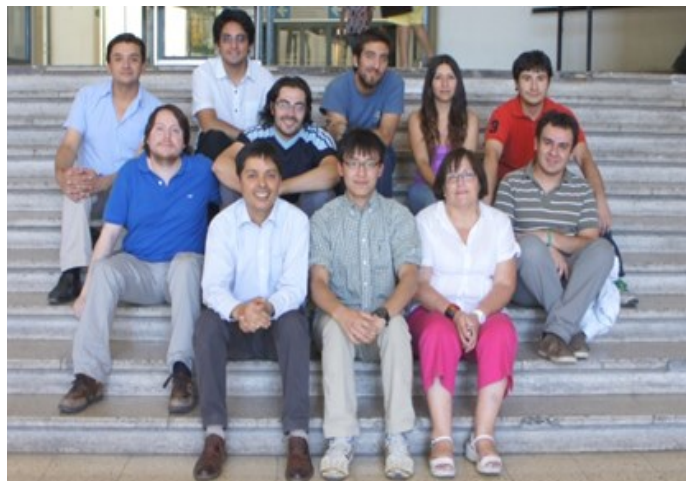
¡VIVA CHILE!

川田大介 チリ大学医学部統合生理学研究室所属

私はチリ大学医学部の統合生理学研究室で腎臓の疾患の研究をしていました。この研究室は過去数年医科歯科生が派遣されてきた研究室とは違い、私が初めて派遣される研究室でした。どういった研究室で何ができるのか分からなかったのが、却ってわくわくし、目いっぱい研究を楽しんでやろうというつもりで臨みました。研究室でまず感じたのは、研究室全体のモチベーションの高さと、教育熱心さです。教授は毎日メンバー一人ひとりと話して研究の調子を聞いて回り、時には長時間に渡って議論していました。私も何度も鋭い指摘を受け、非常に刺激的でした。また、教育目的で、毎週研究員数名が論文を読んでそれを自分でやったかのようにプレゼンテーションさせる練習の場が設けられていました。私も指導教官の前でそういった練習をする機会をいただき、大変勉強になりました。加えて、メンバーみんなの優しさ、親しみやすさを強く感じました。いつも、たわいもない会話を投げかけてくれたり、困った様子をみせるとすぐに助けてくれたりと、皆親切で本当に楽しく明るい雰囲気の中で研究生活を過ごすことができました。研究室の皆さんとの写真を載せましたが、最終日には、わざわざ集合写真を撮る時間を設けてくださいました。ラテンといえば陽気で楽天的で、それは仕事や勉強においても然りというイメージがありますが、実はチリの国民性は、他のラテン諸国に比べると楽天的な気質が薄く、堅実で勤勉ということがよく言われます。私の周りの人達は本当に真面目で、また常に私を気にかけてくれて、良い環境に恵まれました。

チリでプロセメをやる意味についてですが、一つには日々新たな人的交流があったことを挙げたいと思います。研究室ではもちろん、チリの友人や生活の中で関わる人は皆、アドバイスをくれ、たわいもない会話をすることに非常に積極的になってくれたおかげで、研究や日常生活を楽しんで過ごすことができました。逆にそうしたラテンの明るさに触れることで、自分たちからも動こうという気分になされました。また、未経験なことに対しては、なるべく断らずに色々挑戦してみようという心構えで常にいましたが、これは正解でした。研究室で、「〇〇の実験見てみたいかい？」と聞かれたら必ず「Yes!」と言ってついて行ったり、友達に「〇〇に行ってみない？」と誘われたらできる限り「¡Sipo!」(チリ特有の「Si」)と言って参加したりと、とにかく色々やってみようとしたことで毎日が刺激的になり、研究・日常生活ともに楽しめました。

休暇では、沢山旅行もしました。旅行して実感したのは、同じラテンといえども国によって雰囲気・人の話し方・生活様式などに違い



研究最終日、研究室のメンバーと



チリの南部パタゴニアのトレス・デル・バイネ国立公園にて

があること、旅行先で会話を交わす相手とどうすれば仲良くなるかを少しでもつかめたこと、日本人らしくあまり人に話しかけないのではなく、ラテンの人に対してラテンのノリで接するとお互い会話を楽しめるということ、相手の反応はこちらの態度で変わることはどこの国でも同じであることなど、多くの景色を楽しめただけでなく、人的交流も深められた気がしました。このチリでの素晴らしい勉強の機会を与えてくださった江石教授をはじめ医科歯科の先生方、LACRCの河内先生、岡田先生、小林先生、ハイメさま、ご支援いただいた教務課の方々に、この場を借りて深く感謝申し上げます。また、チリで出会った皆さん、お世話になりました。今後の糧となる貴重な経験をありがとうございました。¡VIVA CHILE!

地球の裏側で得たもの

吉岡義朗 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属（前立腺癌）

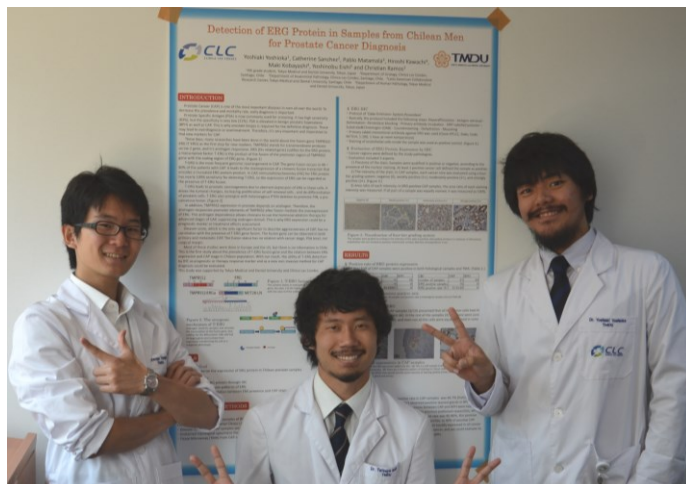
私は現在、CLCの研究室で前立腺癌の新たなマーカーを発見・開発するための前段階として、ある融合遺伝子が前立腺癌の中に発現しているかどうかをチリ人から採ってきたサンプルを用いて実験で確かめています。世界的にホットなトピックなのですが、残念ながらチリ人に関するデータは存在せず、その意味で私の研究はチリでの最初の実験とも言えます。実際にとても有用なデータが出てきており、とても誇らしい気分です。

この流れのまま、まずは研究生活に関してお話させていただきます。CLCはチリでもトップクラスの病院であり、私立の病院なのでとても大きくとても綺麗です。しかし、私たちが所属し研究を行っているラボは、病院からは歩いて3分ほどのやや離れた場所にあり、最初に訪れた際は目を疑いました。というのも駐車場のはずれにポツンとたたずむ童話にでも出てきそうな小屋だったからです。臨床現場との距離を（物理的にも）少々感じております。また、研究室は9割方女性が占めており、中高6年間を男子校で過ごし、大学でも基本的に男同士でむさ苦しく過ごしている私にとってはとても新鮮です。4ヶ月目にしてスペイン語が一向に話せるようになっていない私ですが、みなさん親切に英語でコミュニケーションをとって下さり、大変お世話になっております。

さて、続いては研究室以外でのチリでの私生活に関して述べさせていただきます。日本とは地球のちょうど裏側に位置しており、そのためチリは現在夏真っ盛りです。10月に到着した頃はまだ春で、肌寒い日もしばしばあったのですが、今では最高気温が35℃を超える日が多く、お正月も半袖で過ごし、なんだか不思議な気分です。日本の夏といえば湿度が尋常でないほど高く、個人的には「溶ける」という表現がぴったりだと思うのですが、こちらの夏はカラッとしており全く不快ではありません。ただし、太陽がさんさんと照っており、紫外線も日本の6倍というデータもあるほどで、まさに「焼ける」あるいは「焦げる」といったところでしょうか。そんな暑さの中、週に2～6回ほど剣道をしております。こちらの剣道のレベルは予想に反してとても高く、非常に楽しめております。チリのナショナルチームの面々とともに仲良くなり、稽古に飲み会に精を出しておる次第です。12月にはチリ選手権が開催され、私も選手・審判として参加しました。個人戦に出場して優勝してくるのが目標だったのですが、残念ながら国籍の問題で団体戦のみの出場でした。チームはすぐに負けてしまったものの、地球の裏側でこうして「交剣知愛」が実践できたことをとても嬉しく感じております。驚くべきは、ナショナルチームの選手たちは皆英語がとても流暢だということです。おかげでコミュニケーションには事欠かず、英語力も向上しておりますが、ただ裏を返せばそのせいで私のスペイン語は何一つ上達しておりません。これは現地学生との交流の際にも言えることです。こちらで日本語を勉強している学生と交流を持つ機会があり、友人がたく



チリ選手権にてチームのメンバーと



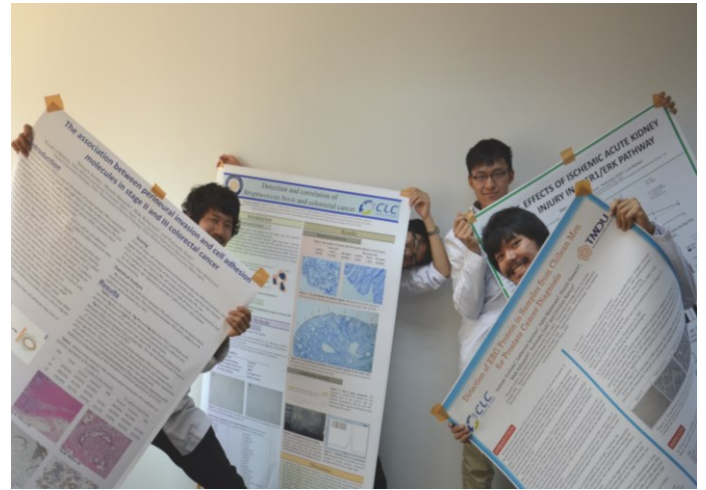
チリでの研究成果発表会終了後

さんできたのは良いのですが、なぜか会話は英語か日本語で行われ、彼らが教えてくれるスペイン語といえばチリでしか通じないスラング（しかも相当下劣なもの）ばかりで、私は早々にスペイン語の習得を諦めました。代わりに英語力をつけようと心に決め、積極的に英語を使っていたところ、来た当初はアルカイックスマイルでたどずっと聞いていたのが、今では対等に会話できるまでになりました。日本に帰ってからもキープしたいものです。

派遣学生同士も野郎ばかり4人、とても仲良くやっております。「せっかく30時間もかけて南米まで来たのだから他の国にも行かなきゃ損！」というモットーのもと、マチュピチュ（ペルー）やウユニ塩湖（ボリビア）、サンパウロ・リオデジャネイロ（ブラジル）、ブエノスアイレス（アルゼンチン）と、時間を見つけては旅行に行っております。

国や街によってそれぞれの雰囲気やカラーにかなりの違いがあり、行くたびに視野が広がり、人間的にも成長できているように(勝手に)感じております。また、毎回の旅行でチリの先進国具合や治安の良さをまじまじと実感します。ただそんな「南米＝安全な国」でも日本と比べれば格段に危なく、心のどこかに生まれていた油断が財布をすられるという悲劇をもたらしたのは自明の理と言えるでしょう。日本がいかに安全か、そしてそれをいかに当たり前と考えがちかを身をもって実感させられた一件でした。

最後に、こうして異国の地で研究生生活を円滑に送ることができたり、人として成長することができたり、かけがえのない友人と出会えたりしたのも、すべては現地スタッフの先生方をはじめ、医科歯科大学のたくさんの方々のご尽力があったからこそです。言葉では到底表現できませんが、この場を借りて厚く御礼申し上げます。残り1カ月弱、悔いの残らないよう、何事にも全力で取り組む次第です。嗚呼、帰りたくない。



発表ポスターと学生達

20,000km、 海の彼方で

柳平貢 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属（大腸癌）

先日、私はChileでの研究の最後のプレゼンテーションを終えました。研究生生活も一段落した今、午後9時になっても沈まない太陽を眺めながらこの文章を書いています。

私が研究しているラボは、Clinica Las Condesと呼ばれる大きな病院の一角にあります。そこで私は大腸がんと腸内細菌の関連をテーマに、この3ヶ月間研究を行ってきました。私の所属するラボのメンバーの大半は女性で、研究室は毎日とてもにぎやかです。毎日スペイン語で話しかけて頂いているお陰か、スペイン語を聞き取ることに少し慣れてきました。ですが私が何か話そうと頭の中で動詞を活用させていると、彼女達はもう次の話を始めています。彼女達と渡り合うためには、まだまだ話す鍛錬が必要です。

研究の議論は英語で行っています。研究開始直後は、進捗報告や今後の方向性などを話す時に専門用語が全く分からず、本当に苦労しました。例えば、「centrifuge（遠心分離する）」と言いたい時に単語が思いつかず、指導教官の前で腕をぐるぐる回して説明した事もありました。そんな苦い思い出もありましたが、今では稚拙ながら英語での議論にも慣れました。私の指導教官はDr. Gonzaloで、大変スマートで教育熱心な方です。彼は私が立てた実験計画について親身になって議論して下さり、また必要な試薬や機材を話すとその場で手配して下さいます。今回のプロジェクトセメスターでは本当にお世話になりました。

研究室の外でも、たくさんの親友に出会うことができました。特にSantiago大学の日本語専攻の学生とは交流が深く、お祭りやBBQ、買い物など多くの時間を共に過ごしました。帰国を1ヶ月後に控え、最近はおちこちでお別れ会を開いてくれます。「チリで医師をやった



雨上がりのマチュピチュにて



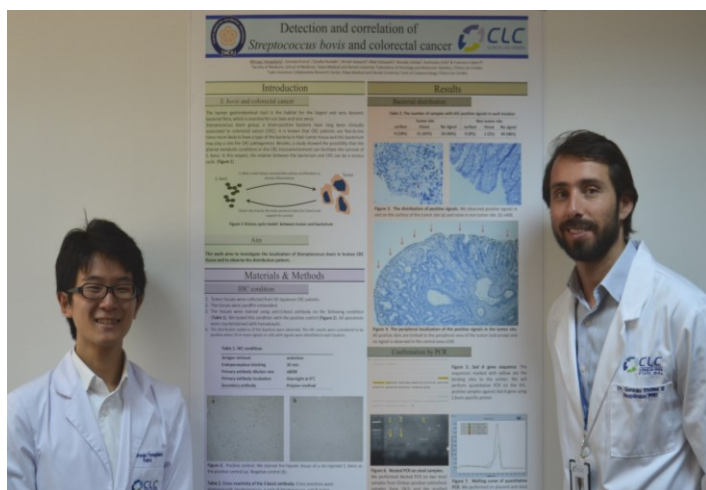
Uyuni塩湖にて

方が儲かるよ。日本帰るなよ。」などと誘惑してくる友人も居ますが、お金の問題は別として、もう少しChileにいられたらな、と寂しさを感じます。

研究の暇を見つけては、南米諸国を旅しました。ペルーのマチュピチュ、チリのアタカマ、ボリビアのウユニなどです。金曜日の実験を終えた夜、かばんにパスポートと着替えを詰め込んでバスに飛び乗りました。ちょっとした休暇を利用して南米屈指の観光地を訪れることができるのは、大変貴重な機会だと思います。長い登山の末に俯瞰したマチュピチュ遺跡、クスコで見た青とオレンジの夜景、アタカマで見た満天の星空、ウユニ塩湖に反射した朝焼け、海拔4,500mで迎えた新年など、一生忘れられない思い出です。最後になりましたが、今回このような貴重な機会を下さった江石教授、生活面でも研究面でも支えて下さった河内先生、小林先生、岡田先生、Jaimeさん、丁寧に実験手法を教えて下さったDr. Gonzalo他ラボの方々に、この場を借りて御礼申し上げます。



ラボのみんなと



指導教官・エンシナ研究員と研究発表会にて



日本語を勉強しているサンティアゴ大学の学生と

編集後記

まるで昨日のように思い出しますが、LACRCオフィスで勤務しはじめてから、もう近く1年になります。オフィスで過ごした期間は、短いものと言えますが、実際には自分の目の前で、LACRCの先生方の多くの離任及び着任を体験しました。今回は、小林助教の番になりました。“This will definitely be a great loss for our team and we will miss her a lot”. 今後もLACRCスタッフの活動を本Newsletterを通じて、ご報告してまいります。(ウレホラ・ハイメ)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 13, March 2014

[発行日] 2014年3月31日
[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780 Fax: (56-2) 2610 8610
Email: jurrejola@clc.cl

Newsletter

No. 14 June 2014

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

「魚の釣り方、井戸の掘り方」

私達のように国際協力関連の仕事に携わっていると、この分野にまつわる格言・名言のようなものをしばしば耳にします。中でも私が感銘を受けたものの一つをご紹介します。

世界で水が不足している地域に井戸を掘る活動を行う、インターナショナル・ウォーター・プロジェクトという団体があります。その代表の方が話されていたのが、「ただ水を与えるのではなく、井戸の掘り方を教えよ」というものです。もとはアフリカのことで「飢えている友達がいたら、ただ魚を与えるのではなく、釣り方を教えよ」に端を発します。飢えに困った人がいた場合、すぐに魚を与えてしまえば同じことが再び起こりうる、釣り方を教えて魚を継続的に得られるようにすることこそが真の解決につながる、という意味です。「井戸の掘り方を教える」とはまさにこの自立支援を促すもので、国際協力の精神の真髄とも言えるでしょう。短期的な成果ばかりを追求するのではなく、長期的に現地の人々にとって何がプラスとなるか、そのためにどのようなプロセスが必要か、ということを常に考えさせられます。

私は現在チリ人医師に対して内視鏡技術の指導を行っており、彼らが日本式の技術を身に付けて日々上達するのとても頼もしく感じております。しかしながら医療行為の指導は日本人同士であっても骨の折れる仕事です。技術指導は本来論理的に説明されるべきものではありませんが、一方で内視鏡には施行者にしか分からないような感覚的な側面も少なくありません。現地ではさらに言葉や文化の壁があり、細かな点や感覚的な要素をどう伝えるかといつも頭を痛めています。

どうしても彼らが行う検査は時間が掛かってしまうため、ふと、内視鏡業務を全部自分でやってしまった方が早いのではないかと、安全に終われるのではないかとつい思いが頭をよぎります。しかし後人が育たなければ状況は変わらず、自分たちが去った後はまた元の状態に逆戻りしてしまうでしょう。そんな時こそこの格言を思い出し「魚の釣り方、井戸の掘り方」を教え、もし自分たちがいなくなっても同じようにプロジェクトが続けられるよう、ひいては彼らが次の指導者となり日本式技術指導の担い手となれるようにと、日々勤しんでおります。

最後に、元国連難民高等弁務官の緒方貞子さんのお言葉です。

「自分の国だけの平和はありえない。世界はつながっているのだから。」

岡田 卓也 LACRC 食道・一般外科学分野



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
エクアドルプロジェクト	2
PRENECの進捗状況	4
TMDU派遣団の活動報告	6
LACRC活動報告	8
プロジェクトセメスター	9

エクアドルプロジェクトが大きく前進

本学は2012年8月、エクアドル保健省と大腸癌検診プログラム協力に関する協定を締結しました。以降、拠点病院であるキト・国立パブロ・アルトゥロ・スアレス病院において大腸癌検診プログラムが進められ、本学はLACRCを中心にプロジェクトへの支援を続けてまいりました。初年度の検診成績が大変良好なものであったことから、本プロジェクトは他病院、他地域へと広がる国家プロジェクトへ発展しようとしています。

エクアドルでのプロジェクトの進捗報告



エクアドル共和国の基礎情報

- ・首都 : キト
- ・言語 : スペイン語
- ・人口 : 15,298,268 人
(在留邦人数は399人)
- ・面積 : 283,560 km²
(日本の約3分の2)
- ・大統領 : ラファエル・コレア氏

2012年の協定締結と前後して国立パブロ・アルトゥロ・スアレス病院にて進められてきた免疫学的便潜血反応検査(iFOBT)を用いた大腸癌検診プログラムは、パイロットプログラムと位置づけられていました。2013年にパイロットプログラムの結果がまとめられましたが、検診参加者4253名、内視鏡検査が146例に施行され、51名に腫瘍性病変が、うち12名に大腸癌が見つかりました。

発見された大腸癌の中には、従来エクアドルでは発見されることがほぼ皆無であった表面型早期大腸癌も含まれており、本検診プログラムの有用性が期待される結果となりました。本プログラムは、将来的な大腸癌の死亡率低下のみならず、手術や化学療法を必要としない早期癌の比率が増加することによる医療費の抑制という点でも期待されるものです。

エクアドル保健省は本パイロットプログラムの結果を重視し、キト市内の複数施設およびキト最大の都市であるグアヤキル、またエクアドル内で大腸癌の発生率が高い地域として知られる南部のロハにおいても大腸癌検診プログラムを展開する方針を固めました。現在、国立パブロ・アルトゥロ・スアレス病院のプロジェクトリーダーであるモンタルボ医師が中心となり、検査・診断・治療に関する共通のプロトコル作成やデータベース・ネットワーク構築などの作業が進められています。

エクアドル政府は、本検診プログラムにおいては本学の協力が必須と認識しており、内視鏡検査・診断や病理診断の指導のみならず、プロトコル作成やデータベース構築等の点においても協力を要請しています。また、大腸癌のみならず、エクアドルで頻度の高い胃癌、子宮頸癌、前立腺癌、乳癌といった領域でも検診プログラムを構築する計画も進められており、そのうち胃癌に関しては日本の早期胃癌の診断・治療技術を取り入れる方針となっています。

本学のエクアドルへの協力に対しては、在エクアドル日本国大使館からも高い評価を頂戴し、プロジェクトの推進のため拠点病院へのご支援も頂いております。

以上のように、エクアドルプロジェクトは本年に入り大きく前進しており、大腸癌、胃癌に関しては本学の協力がこれまで以上に重要となっております。LACRCとしましては内視鏡部門、病理部門ともにエクアドルの癌診療に寄与できるよう今後も一層努力してまいります。

第二回エクアドル日本・大腸病変講習会を開催

2014年6月3日から6日にかけて、エクアドル・キトにおいて、「第二回エクアドル日本・大腸病変講習会」が開催されました。本講習会はエクアドル保健省と本学との共催で実施され、LACRCより河内講師、岡田助教が講師として参加しました。国立パブロ・アルトゥロ・スアレス病院のスタッフや今後プロジェクトへの参加を予定する施設の医師ら、計60名以上が講習に参加しました。内視鏡部門は岡田助教が担当し、初日に「大腸内視鏡の前処置と挿入法」、「大腸癌検診の開始に伴う問題点と解決法」についての講演を行いました。その後、参加者の前で実際に大腸内視鏡検査を行い、挿入法と粘膜切除術に関する解説を行いました。手技の見学には約20人の医師が集まり、検査室から溢れるほどの盛況となりました。病理部門は河内講師が担当し、日本の大腸癌分類の紹介や、早期癌の診断方法などについて講義を行ったほか、実際に症例を顕微鏡で観察しながら病理所見の解説や参加者との討論等が行われました。最終日には内視鏡部門、病理部門合同で大腸病変の症例検討会を行い、診断や治療に関する解説や討論を行いました。エクアドルでは早期大腸癌の症例が少ないため経験に乏しい内視鏡医・病理医も多く、LACRCが引き続き支援を行う必要があると考えられました。

また滞在中、プロジェクト参加予定施設のひとつである、カルロス・アンドラデ・マリン社会保険病院への訪問・視察も行いました。



開会式典の様子



コース終了後、一部の参加者とともに記念撮影



カルロス・アンドラデ・マリン社会保険病院での病理標本検討

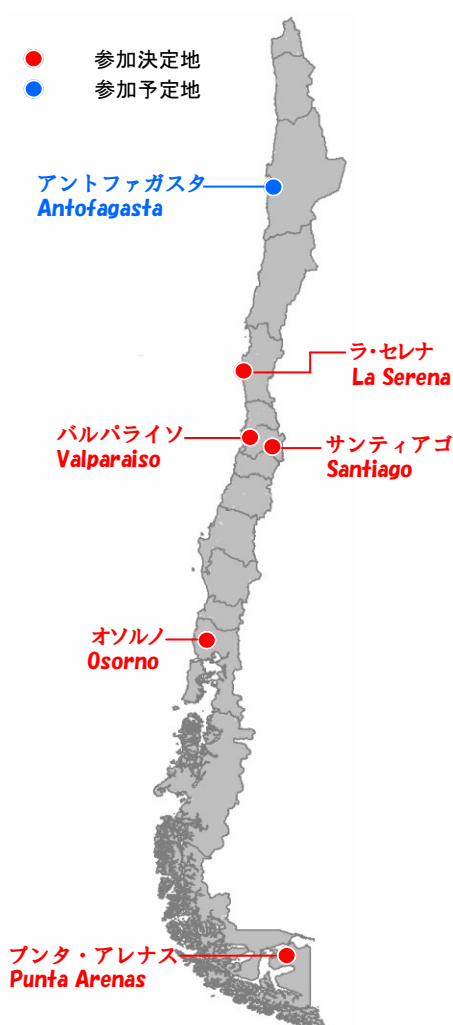


パブロ・アルトゥロ・スアレス病院での大腸内視鏡講習の様子

PRENECの進捗状況

LACRCのメインミッションである大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。このプロジェクトでは、現在第5州バルパライソ、第12州プンタ・アレナス、首都州サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査(iFOBT)を用いた検診プログラムが進行中です。また第4州ラ・セレナ(コキンボ)、第10州オソルノにおいても本年中に検診が開始されることが決まっています。

アントファガスタ市における講習会を開催



“Jornada de Actualización en Cáncer Colorrectal”

チリ北部に位置するアントファガスタ州(第2州)は、豊かな鉱物資源に恵まれた地域であり、世界最大の露天掘り銅山であるチュキカマタ鉱山が位置しています。

6月20、21日の2日間にわたり、アントファガスタ州アントファガスタ市の州庁舎にて、PRENEC開始に向けた説明会が開催されました。説明会にはLACRCより河内講師、岡田助教が、CLCよりロペス医師、サラテ医師、レイェス医師、ウリベ医師、ポンセ看護師が参加し、河内講師と岡田助教はそれぞれ「PRENECにおける病理医の役割」、「大腸ポリープの治療」に関する講演を行いました。

州庁舎では巨大な模擬大腸を用いた展示も行われました。多くの市民が集まり、関心の高さが伺われました。

今後は、アントファガスタでのPRENECが早期に開始されるよう、LACRCも協力をして参ります。



アントファガスタ州庁舎前での模擬大腸展示の様子。中央は、見学者に対して大腸癌検診プログラムの説明をするCLCサラテ医師。

チリ保健省訪問

チリでは本年3月にバチレ新大統領を首班とする新政権が誕生しました。それに伴い省庁の人事も刷新され、保健大臣には小児科医のモリナ医師が新たに就任しました。国を問わず政権交代の際には、政府の方針が大きく転換されることがあります。本学の協力するプロジェクトが新政権下でも無事継続されるのかどうかは大いに懸念されるところです。

本年6月19日、CLCよりテヒアス病院長、ゴイコレア理事、ロペス大腸肛門科部長、国立サン・ボルハ病院よりエステラ日智消化器病研究所所長、およびLACRCより河内講師と岡田助教が保健省を表敬訪問しました。会談ではロペス医師より、これまでのPRENECの参加者10,000名に関する癌の発見率や内視鏡による治療数等の結果を報告し、プロジェクト継続による大腸癌死亡率の低下や経済性についての説明が、エステラ医師よりサン・ボルハ病院におけるトレーニングについての説明がそれぞれ行われました。また、在チリ日本大使館より村上大使と山口書記官がお出ましくささり、プロジェクト継続の必要性などを大臣に訴えてくださいました。

モリナ保健大臣は大変興味深く傾聴され、保健省としてサポートを継続しプロジェクトが拡大できるよう、省内で検討するとのお返事を頂きました。



会談後、チリ保健省にてモリナ新保健大臣らと

サン・ボルハ病院での大腸内視鏡トレーニング

チリ国内の大腸内視鏡検査施行医師を増員するため、2013年10月よりサンティアゴ、サン・ボルハ病院にある日智消化器病研究所で大腸内視鏡トレーニングコースが開設され、LACRCの岡田助教が中心となって指導を行っております。

2014年4月から6月に第二期の研修生として、国立ソテロ・デル・リオ病院よりカルバハル医師がコースに参加しました。大腸内視鏡の安全な挿入法や病変の発見、内視鏡治療に関する指導を行い、技術には目覚ましい上達が見られ、PRENECに参加可能なレベルに達することができました。コース終了後も積極的にPRENECに参加して頂けることを期待しています。



研修中のカルバハル医師(右)と岡田助教ら

TMDU派遣団の活動報告

本学の浅原弘嗣教授、植竹宏之准教授、吉田丘特任教授、下田弘二室長、土屋誠課長補佐からなる訪問団が、本年6月16日から18日まで、チリに滞在しました。

今回の訪問では、本学とチリ大学の間で進められている合同大学院構想（ジョイントディグリープログラム、JDP）のための打ち合わせが主目的でしたが、他に現在進行中のチリにおける大腸癌早期診断プロジェクトに関する活動や、浅原教授らによるCLC腫瘍遺伝学研究室の視察・技術指導等、各種活動も行いました。また在チリ日本大使館への表敬や、プロジェクトセメスター学生との交流も行いました。

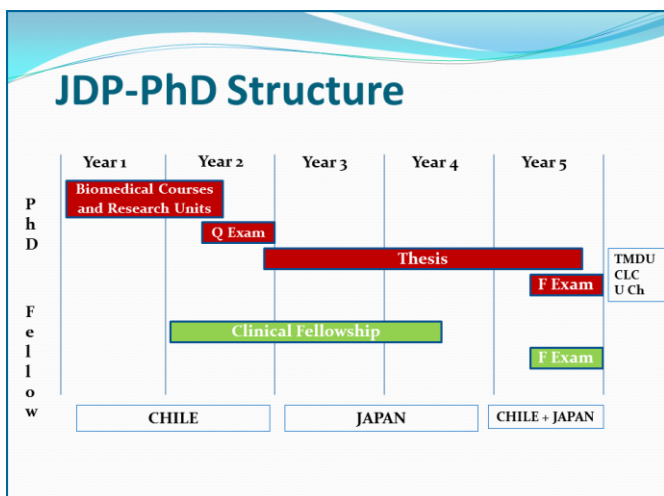
CLCにおける協議（JDP）

本学は、国立チリ大学との間でジョイントディグリープログラムを2016年春にスタートさせる予定です。本プログラムは、主にチリおよびラテンアメリカ諸国の消化器外科医や消化器内科医を対象としており、内視鏡や手術手技等、消化器臨床のトレーニングを中心とした、いわゆる専門医育成プログラムと、基礎研究を行うPhDプログラムとを融合させたユニークなものです。修了者にはPhDの学位およびチリにおいて通用する消化器外科または内科専門医の資格が授与されます。期間は5ないし6年の予定で、学生はチリと日本（本学）を行き来しながら研究・研修生活を送るという計画です。

現在はコースの開設に向け、スケジュールや取得単位数といったカリキュラム・各種規則の調整などの作業が進められています。今回の協議では、臨床トレーニングの具体的な内容、基礎研究における指導体制等について、TMDU側と、チリ大学側（チリ大学および同大クリニカルキャンパスであるCLCの医師達）との間で活発な意見交換が行われました。



協議に先立ち、CLC理事長らを表敬



ジョイントディグリープログラムの概要（UCh: チリ大学）



ジョイントディグリープログラムに関するミーティングの様子

在チリ日本国大使館・チリ大学表敬訪問

6月17日、訪問団およびLACRC教員が在チリ日本国大使館を表敬訪問いたしました。吉田特任教授から、村上大使に大腸癌検診プログラムの進捗状況や、ジョイントディグリープログラム構想についての説明が行われました。村上大使は大変興味深く傾聴され、今後も本学の活動を支援してくださるとのお言葉を頂戴しました。

また翌日、訪問団、LACRC教員、ならびにプロジェクトセメスター学生がチリ大学ビバルディ学長を表敬訪問いたしました。

ビバルディ氏は、本年5月までチリ大学の前副医学部長を務めておられ、プロジェクトセメスター学生の受け入れ等に尽力してくださいました。また学会で訪日された際に、本学を訪問されたこともあるなど本学との繋がり強い人物です。

会談では浅原教授、植竹准教授、吉田特任教授らからジョイントディグリープログラムに関する説明が行われました。またプロジェクトセメスター学生による自己紹介も行われました。

ビバルディ学長は、これまでの本学とチリ大学との交流を高く評価され、今後、ジョイントディグリープログラムも積極的に進め、さらに交流を深めていく旨表明されました。



在チリ日本国大使館にて村上大使らと



歓談するビバルディ・チリ大学新学長と浅原教授



チリ大学本部玄関にて

LACRC活動報告

サンティアゴ消化器シンポジウムに参加

5月28日から30日の3日間にわたりチリ・サンティアゴにおいて消化器シンポジウム「IMÁGENES EN PATOLOGÍA DIGESTIVA」が開催されました。本シンポジウムはCLCと国立サン・ボルハ・アリアラン病院らの共催によるもので、チリ人医師のみならず、米国やブラジル、アルゼンチン等から講師が招かれたほか、LACRCも招待され、河内講師が「早期大腸癌の深達度分類」、「大腸鋸歯状病変の病理」について、岡田助教が「食道早期癌の診断」、「大腸早期癌の診断」について講演を行いました。また、実際の症例を用いた勉強会も催され、河内講師、岡田助教が食道早期癌症例について詳しく解説し、参加者より高い関心を集めました。

討論会では米国のジョンズ・ホプキンス病院やハーバード大学から招かれた講師らと、LACRC医師との熱い議論が交わされました。日本の消化管癌の診断・治療技術の高さをアピールする良い機会となりました。



岡田助教によるプレゼンテーションの様子



発表後、河内講師及び岡田助教によるディスカッションの様子



TMDUポスター前で記念撮影



河内講師によるプレゼンテーションの様子

プロジェクトセメスター

2014年度のプロジェクトセメスターがスタート！

本学は、2010年度より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を約5ヶ月に渡ってチリの研究施設に派遣しており、LACRCでは彼らの研究・生活のサポートも行っています。本年度も6月9日に6名の学生がチリに無事到着いたしました。このうち3名がCLC、3名がチリ大学の研究室に配属されています。住民登録などの事務手続きの後、6月13日には指導教官や関係者がCLCに集まり学生の歓迎ミーティングが行われました。学生たちは英語と、覚えてたスペイン語を交えながら自己紹介をし、その後は各自指導教官らと研究の打ち合わせなどを行いました。また16日には訪智したTMDU訪問団との会食も行われ、交流を深めました。

彼らの留学生活は11月半ばで続きます。既に学生達は研究生活のみならずチリ人学生との交流等、貴重な時間を楽しんでいるようです。最後まで、無事に、充実した日々が送れるよう、LACRCはサポートしていきます。

TMDUプロジェクトセメスターの学生によるブログのご紹介

学生たちが開設したブログでも彼らの生活をご覧いただけます。

ブログ名：東京医科歯科大学チリ留学記2014 ～チリはバッチリ！～

アドレス：<http://tmduchile2014.blogspot.com/>



歓迎ミーティング後、CLCにて指導教官らと記念撮影



チリ料理レストラン“El Aperu”にてTMDU訪問団とともに

編集後記

本月6日よりLACRCオフィスばかりでなく、CLCの各部門においても「FIFAワールドカップ熱」で盛り上がっております。日本チームは、グループステージで2014年FIFAワールドカップブラジル大会から脱落してしまいましたが、河内先生や学生の皆さんと一緒に日本やチリの試合観戦を予想以上に見て楽しむことができました。今後とも、LACRCの活動や学生の留学体験記を本Newsletterを通じて、ご報告してまいります。(ハイメ)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 14, June 2014

〔発行日〕2014年06月30日

〔制作〕Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: jurrejola@clc.cl

Newsletter

No. 15 September 2014

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

特別寄稿

「東京医科歯科大のチリでの活動に敬意を表して」

本年の7月30日、31日に日本の総理としては10年ぶりに安倍総理がチリを訪問されましたが、短い滞在期間にもかかわらず、昭恵総理夫人はサン・ボルハ病院を訪問され、河内講師から東京医科歯科大のチリでの活動内容、ロペス医師からはPRENECの説明を受け、また岡田助教、小林助教とも意見交換をされました。この訪問が実現したのは、医科歯科大による40年以上にわたる当地での地道な取り組みが評価されたからであります。

私はこの9月に3年間の任期を終え日本に帰任いたしました。チリは我が国にとって中南米の玄関であると感じています。スペイン語人口は約4億人存在し、その南米スペイン語圏の入口がチリであります。チリには80社以上の日系企業が進出しており、当地からペルーやコロンビアを管轄している企業もあり、またチリ豪州大使館は他の南米3カ国を管轄しています。



現在、我が国は医療技術の海外展開を官民一体となって進めています。チリは医療分野のレベルも高く、南米で2番目と3番目（CLC）にレベルの高い病院がチリにあり、PRENECで実施中の大腸がんの遺伝学的研究を行うためには最適な場所です。胃がん、大腸がん発生率の高いチリにおいて40年前から活動を展開してきたことはまさに慧眼であります。また、大腸がんの早期発見・治療をめざす中南米諸国の国家プロジェクトを支援するために、医科歯科大がチリにラテンアメリカ共同研究拠点を設置し、順次エクアドル、パラグアイへと展開していることを心強く感じます。

しかし、医科歯科大のチリでの活動に私が共鳴するのは、長期にわたるチリでの継続した活動もさることながら、海外でも臨床を重視した姿勢であります。医科歯科大の教員をチリに長期派遣し、現地の患者を直接検診することによって、日本の医療技術を中南米の医師に伝授する。己の持てる技術を持たざるもののために役立たせる、そんな医療の基本姿勢をひたむきに実施されているように感じます。ひるがえって、その活動の中で蓄積された臨床データが遺伝学的研究や食文化要因あるいは比較疫病の研究にも役立つのではないかと思います。

中南米では我が国に対する信頼度は非常に高いですが、地球の裏側で地道に医療技術を伝授している医師たちの活動が、この信頼感を生み出す源泉であると思います。当地での活動を継続していくことは容易ならざる事かと思いますが、医科歯科大のこれまでの活動に敬意を表すと共に、今後の展開に期待しております。

村上 秀徳 前チリ国駐劄特命全権大使



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

村上前大使特別寄稿.....	1
安倍昭恵総理夫人チリ訪問....	2
TMDU派遣団の活動報告.....	3
プロジェクトセメスター.....	7
LACRCの活動報告.....	10

安倍昭恵総理夫人チリ公式訪問

国立サン・ボルハ病院にて内視鏡供与式を開催

7月30日、安倍総理夫妻が中南米訪問の一環としてチリを訪問されました。安倍昭恵総理夫人は、PRENECのサンティアゴの拠点であり、本学が長年にわたり技術協力を実施している国立サン・ボルハ病院で行われた、草の根・人間の安全保障無償資金協力の内視鏡供与式に出席されました。

LACRC河内講師が、本学を中心とした日本とチリとの約40年にわたる医療技術協力関係等を説明した後、ジョレンス医師（日智消化器病研究所初代所長）、エステラ医師（同研究所現所長）、岡田助教、小林助教の4名が安倍総理夫人と懇談致しました。安倍総理夫人は、「今回の内視鏡の供与によって、チリの多くの方々が検診を受け、がんによって亡くなる方が減ることを期待します。」と述べられました。



挨拶する昭恵夫人



プレゼンテーションをする河内講師



供与式における懇談の様子



供与式後、参加者らと記念撮影

TMDU派遣団の活動報告

本学の吉澤靖之学長、江石義信医学部長、近藤弘副学長、河野辰幸教授、北川昌伸教授、森尾郁子教授、小嶋一幸教授、植竹宏之准教授、荒木昭博講師、吉田丘事務部長、山本正彦学務部長、福井美子通訳からなる12名の訪問団が、8月10日から15日まで、チリを訪問しました。今回の訪問では、Simposio Internacional ENDOSUR(国際シンポジウム、以下ENDOSUR)への参加や、チリ大学とのジョイントディグリープログラムの打ち合わせ、PRENECの進捗確認及び今後の展開のための各種機関との面会を実施しました。また訪問団は、チリ滞在后、エクアドルを訪れ、INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON GASTROINTESTINAL TUMORS(第3回消化器腫瘍に関する国際シンポジウム)に参加しました。

また、TMDU派遣団がチリ保健省を訪問し、バラウス保健副大臣、ソト官房長と会談しました。バラウス副大臣は、今までの本学の活動に対する感謝と、今後の継続した支援を表明されました。また、JICAチリ支所、サン・ボルハ国立病院、CLCを訪問し、チリにおける活動報告及び、今後の展望を話し合いました。

国際シンポジウムENDOSURへの参加



本学がチリ側と共同で毎年実施してきた消化管疾患に関する国際シンポジウム「ENDOSUR」が本年も8月11日から13日までの3日間にわたって開催されました。今回は日本を始め、米国や欧州から23名の医師が演者として招かれ、消化管疾患に関する講演や研究発表を行いました。本学より、訪問団、及びLACRCスタッフ3名が参加しました。開会の辞を吉澤学長が行い、江石医学部長、河野教授、小嶋教授、植竹准教授、荒木講師、河内講師、岡田助教、小林助教がシンポジウムで発表致しました。同時に開催されたワークショップではチリにおけるPRENECの取り組みを紹介するとともに、国内外にPRENECへの参加を呼びかけました。



開会式における吉澤学長のスピーチ



シンポジウム会場にて

チリ大学医学部および附属病院訪問

8月13日午後、国立チリ大学医学部を訪問し、ビバルディ学長、ククルジャン医学部長らと懇談しました。懇談では現在準備中の本学・チリ大学によるジョイントディグリープログラムを滞りなく進めること、今後さらに交流を深めていくことで一致しました。その後、プロジェクトセメスター学生が配属されている3研究室を訪問しました。また、同日午前には、チリ大学医学部に隣接するJ.J.アギレ医学部附属病院を訪問し、ブラゲット外科部長、ルイス内科部長らと面会したほか、病棟や検査室等の視察を行いました。



ビバルディ学長、ククルジャン医学部長らとの記念撮影



チリ大学医学部にて



プロセメ研究室視察風景



チリ大学附属病院ブラゲット外科部長との懇談風景

プロジェクトセメスター中間発表会

チリに派遣されているプロジェクトセメスター学生による中間発表会が行われました。派遣先の指導教官や訪問団も参加し、活発なディスカッションが行われました。



松本惇奈によるプレゼンテーションの様子



稲田賢人によるプレゼンテーションの様子

在チリ日本国大使公邸へ訪問

8月14日夕刻、在チリ日本国大使公邸での訪問団歓迎晩餐会にご招待頂きました。会には大使館から村上大使、折原参事官、野々村書記官、山口書記官がご臨席され、吉澤学長からチリにおける活動状況と今後の展望をご説明致しました。



村上大使らと記念撮影



村上大使と吉澤学長

エクアドル訪問

本学は2012年にエクアドル政府保健省との間に、大腸癌検診プロジェクト協力に関する覚書を締結しております。以降、拠点病院であるキト・国立パブロ・アルトゥロ・スアレス病院において大腸癌検診プログラムが進められています。また本学は覚書に基づき、年に1回、エクアドル保健省と共催で消化管に関するシンポジウムを開催しております。この度TMDU訪問団は同シンポジウムに参加するため、8月16日から19日までの間、エクアドル・キトを訪問しました。8月18日にはキト・エクアドル保健省内講堂において、第3回消化管腫瘍に関する国際シンポジウムが開催されました。本シンポジウムは本学とエクアドル保健省との共催で、2012年に始まり今回で3回目となります。本学訪問団からは江石義信医学部長、河野辰幸教授、小嶋一幸教授、植竹宏之准教授、荒木昭博講師が、LACRCから河内洋講師、小林真季助教、岡田卓也助教がそれぞれ講演を行いました。エクアドルの医師、技師、看護師等、多くの参加者による活発な討論が行われました。開会式には在エクアドル日本国大使館・小瀧徹特命全権大使を始め、日本国大使館、JICAエクアドル支所からもご臨席を賜りました。

また同日夕刻には、小瀧大使公邸にお招き頂きました。江石医学部長らから小瀧大使へ本学訪問団の活動を御報告するとともに、晩餐会ではエクアドル保健省要人らと親交を深めることができました。



第3回消化管腫瘍に関する国際シンポジウム開会式



シンポジウムでの討論の様子



エクアドル保健省を訪問



在エクアドル日本国大使公邸晩餐会にて小瀧大使らと

プロジェクトセメスター学生チリ滞在記

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を5カ月間にわたってチリの研究機関へ派遣しており、LACRCでは、彼らの研究・生活のサポートも行っています。本年度も6月9日に6名の学生がチリに到着し、うち3名がCLC、3名がチリ大学の研究室に所属しました。本号では、CLCの研究室にて研究する派遣学生のチリ滞在記をお届けいたします。

チリ 人との出会い

稲田賢人 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属

私は、現在プロジェクトセメスターの期間にチリに派遣させていただいている、稲田賢人と申します。チリでの約3ヶ月の生活の様子について、ご報告したいと思います。

研究については、「先輩方がやっていなかったテーマをやってみよう！」という思いがあり、大腸がんの新しい治療につながるOrexinというホルモン及びその受容体に関する研究を行っています。毎週金曜日のミーティングでは、英語で進捗状況をプレゼンするのですが、そこで研究室の先生方に厳しいご指摘やアドバイスをたくさん頂戴しています。その中でも、「大切なのは、聴衆に自分の研究の“story”を伝えることなんだよ」と教えていただいたおかげで、自分のプレゼンの質が上がってきていると思います。



指導教官のAnitaさんと

研究以外の生活面についてですが、はじめの頃は、全く話せない上に聞き取れないスペイン語に嫌気がさし、正直なところ「なんで日常生活を送る上でスペイン語がわからなくてはいけないんだ！」と思っていました。しかし、サンティアゴ大学の日本語学科の学生やチリ大学の学生との出会いのおかげで、その考えが変わってきています。W杯の時期にはスポーツバーでの観戦に誘ってもらったり、休日にはパーティーに呼んでももらったりと、彼らは本当に私たちのことを考えて親切にしてくれています。そんなチリ人の友達が、一生懸命に私達日本人の母国語である日本語を勉強し、そして愛着をもって日本語を話してくれるのです。そのような姿を見て、最近に

なつてようやく、「なんとかしてスペイン語でもコミュニケーションをとってみせる！」と奮起しました。外国人との交流において、互いに歩み寄る姿勢の大切さを学んだ気がします。



私達が日本食を振る舞ったパーティーで、チリ人の友達と

また、チリ人との交流だけでなく、在チリ日本人との交流の機会にも恵まれました。私は大学で硬式庭球部に所属しているのですが、チリでもテニスをしたいと思い、毎週土曜日の午前中に、日本人テニスクラブの練習に参加させていただいています。また、その練習に参加されている駐在員の方のお仕事のお話も伺うことができ、日本にいては関わるができなかったであろう人との出会いを通じて、どうしても医学の勉強に偏りがちであった自分の見識を深めることができているように感じます。



在チリ日本人テニスクラブの方々と

最後になりますが、現在安全で且つ充実した毎日をチリで送ることができているのは、いつも支えてくださっているLACRCのスタッフの皆様、ならびにチリに派遣してくださっているTMDUの先生方のおかげです。この場をお借りして感謝申し上げます。引き続き、チリでの人との出会いを大切にしながら、研究活動に邁進していきたいと思っています。

Mi vida en Chile

松本惇奈 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属

Hola! こんにちは。クリニカ・ラス・コンデスの泌尿器科の研究室に配属されている、医学科4年松本惇奈です。

私の研究テーマは、前立腺癌の検出のために用いるPSA値に関わる遺伝子です。いま、PSAの検査の特異度が低いために、癌でない患者にも生検が繰り返される場合があります。その改善のために、前立腺癌以外で「PSA値の上昇の原因となる」と先に報告された因子の中の一つ、遺伝子のSNPIによって、チリ人のPSA値がどのように変わるのかを研究しています。

習慣や設備など、日本との違いに戸惑うことも多いですが、先生と英語で議論し、指導を受けることは日本でできないことだと思います。また、論文を読んで必要な情報をつなぎ合わせたり、100もの検体を扱ったりする中で、研究面においても多くの学びを得ています。また、私の研究室は、科は笠野・稲田の二人と違うものの、使う機材や研究する空間は同じで、二人と多くの行動を共にしています。

生活面では、先輩から紹介していただいた友人にスペイン語を習ったり、チリに留学している中学校時代の友人と再会したり、アメリカから留学中の学生と知り合ったり、チリ大医学部の学生とキャンパスで出会い観光に出かけたりと、交流の輪を広げています。さらには、友人の協力のもと、公立病院に見学に行く機会を得、同時にサンティアゴ大の糖尿病の授業を聴講しました。こうしてクリニカ・ラス・コンデスで研究しているだけではわからないこの国の側面にも触れようと努力しています。

私は1年次にスペイン語を選択せず、渡航前の講座からのスタートでしたが、ラボの他の研究員や友人と会話したい一心で、スペイン語に精一杯取り組んでいます。英語でもコミュニケーションができる相手でも、スペイン語を少しでも話そうとすると、とてもうれしそうに話を続けてくれ、距離が一気に小さくなります。英語という「共通言語」の存在に頼るだけでなく、文化や言葉の違いを受け入れ、少しでもなじもうとする姿勢の重要性を強く感じています。

最後に、私の留学生活を支えてくださっているLACRCのスタッフの皆様、TMDUの先生方、心より御礼申し上げます。また、家族、そしてチリと一緒に来ている5人の仲間に、大きな感謝の気持ちを伝えたいです。この留学は私にとってとてもかけがえのないものになっています。

留学期間も残り半分となりましたが、悔いを残さぬように過ごしていきたいと思っています。



友人とFondaに行った時の様子



Sánchez担当教官と



公立病院にて

チリでの日々

笠野由佳 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属

6月にチリに到着して、早いものでもうすぐ3ヶ月が経とうとしています。こちらでの生活の様子を簡単にご紹介できたらと思います。

まず研究についてですが、私はクリニカ・ラス・コンデスの腫瘍学・分子遺伝学の研究室で、腸内細菌の一種と大腸癌の関係性についての研究を行っています。研究室通いが始まってしばらくは自分の研究テーマと関係する論文を読み、それらを参考にしたプレゼンをミーティングで行うというスケジュールでした。

ミーティングでは、自分の指導教員の方だけでなく他の方からもプレゼンについて多くのアドバイスを頂くことができるので、毎回学ぶことがたくさんあり大変勉強になっています。

8月に行われた第一回進捗ミーティングの前まではこのようなデスクワークが主でしたが、現在はいよいよ本格的に手技が始まろうとしているところです。

次に生活についてですが、到着後すぐに同じ南米大陸のブラジルでワールドカップが開幕しチリも出場していたため街は大変な盛り上がりとなっていました。休日に行われた試合の時はチリ人の友人とともにスポーツバーで、平日の試合の時は研究室の皆さんと研究室で一緒に観戦しワールドカップ開催期間はサッカーが生活に占める割合が大きかったように感じます。

チリが試合に勝利した時はすれ違った知らない人たちと喜び合うなど、いわゆるラテンのノリというものを身をもって体験することができました。

また、先日私はこちらで誕生日を迎えました。誕生日当日は研究室、同じくチリに派遣されている大学の友人たちそれぞれにサプライズで祝っていただきました。研究室のパーティーでは突然“Happy Birthday”の歌を「お誕生日おめでとう」とスペイン語でも英語でもなく日本語で歌われたので大変驚きました。これまで日本では真夏に迎える誕生日だったので、冬に迎える誕生日というのは新鮮でした。それだけでなく、1日に2回も誕生日を祝ってもらえるということも今まで体験したことがなかったためとても思い出に残る誕生日となりました。



研究室での誕生日パーティー

このように楽しくチリで生活を送れているのはLACRCのスタッフの皆様、医科歯科大学の先生方等たくさんの方のご支援のおかげだと思います。最後に、この場をお借りして御礼申し上げます。

こちらでの残された時間も研究、生活ともに有意義なものにしていきたいと思っています。



スポーツバーにて隣のテーブルに居合わせた人たちと



CLCのドクターヘリの前で集合写真

LACRCの活動報告

ラ・セレナにて講習会を開催

LACRCのメインミッションである大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。このプロジェクトでは、現在第5州バルパライソ、第12州プンタ・アレナス、首都州サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査(iFOBT)を用いた検診プログラムが進行中です。また第4州ラ・セレナ(コキンボ)、第10州オソルノにおいても本年中に検診が開始される予定です。

この度、ラ・セレナ市にて、北カトリカ大学主催により腫瘍に関する講習会が催され、LACRCスタッフが講師として参加しました。

河内講師は「早期胃癌の病理分類と内視鏡治療適応」、小林助教は「食道上皮内病変における遺伝子解析」、岡田助教は「逆流性食道炎、バレット食道の診断と治療」、「早期食道癌の診断と治療」、「日本における胃癌スクリーニング」に関する講演をそれぞれ行いました。

ラ・セレナでは今後のPRENEC参加に向けた準備が始められ、LACRCスタッフも積極的に提言を行っております。

土屋品子厚生労働省前副大臣チリ訪問

8月6日、厚生労働省より土屋品子前副大臣がチリをご訪問され、保健省、サン・ボルハ病院、クリニカ・ラス・コンデスをご訪問されました。

クリニカ・ラス・コンデスでは、LACRCスタッフがチリ国内や南米各国における活動内容の報告を行い、土屋前副大臣からは励ましの言葉を頂戴しました。

また、モリナ保健大臣との会談では、土屋副大臣がTMDU・LACRCのチリでの役割及び活動の重要性を強調してくださいました。



会談後、CLCにて土屋副大臣らと記念撮影

編集後記

本年11月には、LACRCスタッフは2010年の設立以来最多になります。9月25日には椿教授がチリに到着しました。更に11月下旬には小田柿助教が赴任予定です。つまり、今年度中に教授1名、講師1名、助教3名の計5名体制となる予定ですので、かつてないほどにオフィスが賑やかになりそうです。今後もニュースレターを通じて、LACRCの近況をご報告してまいります。今後の誌面にあたり、皆様からご意見・ご要望等がございましたら、お気軽にご連絡くださいませ。(ウレホラ・ハイメ)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 15, September 2014

[発行日] 2014年9月30日
[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780 Fax: (56-2) 2610 8610
Email: jurrejola@clc.cl

Newsletter

No. 16 December 2014

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

着任のご挨拶

LACRCニュースレター16号の巻頭言にあたり、着任の御挨拶をさせていただきます。

この度、2014年9月25日に東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点特任教授として着任致しました。1983年弘前大学を卒業、東京医科歯科大学第一外科に入局。都立広尾病院、都立墨東病院、土浦協同病院、取手協同病院、友愛記念病院等で研修を受け、その後大腸班の一員として直腸癌に対する自律神経温存手術術式の適応と成績を中心に大腸外科・大腸内視鏡検査を研鑽。1994年に病理学中村恭一教授や、癌研に勤務しておられた高橋孝先生の勧めと、第一外科遠藤光夫教授の御快諾を頂き、サンティアゴ市内にある国立サンボルハ病院・日智消化器病研究所にJICA専門家として赴任。当時のチリは軍事政権から民政移管され4年目で、海外に逃れ戻って来た医師達の話聞き、複雑な政治事情に戸惑いながらの1年間でした。



1998年4月から約13年間獨協医科大学第一外科に勤務、大腸外科・大腸内視鏡検査を担当。2011年7月からは友愛記念病院に勤務しておりました。

今回のチリ派遣は、大山前学長、吉澤現学長、江石教授、河野教授の御勧めと、友愛記念病院・加藤院長の承諾によって実現したものです。拠点であるClínica Las Condes病院(CLC)は、Robotic Surgeryの設備も整っており先進医療が可能で、内視鏡検査を指導・実践するサン・ボルハ病院は旧知の外科医達との交流もでき、私には有難い環境であります。

現在PRENECはチリ国内に拡大しつつあり、エクワドルでの活動も軌道に乗っています。今後も現地医師やスタッフと協力しながら、私がこれまで蓄積してきた知識や技術が確かな足跡となり、また東京医科歯科大学におけるグローバルズムの一助となるよう尽力する所存でありますので、宜しくお願い申し上げます。

簡単ではありますが、自己紹介を兼ね着任の御挨拶とさせていただきます。

Hasta Pronto.

椿 昌裕 東京医科歯科大学チリ拠点特任教授

LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

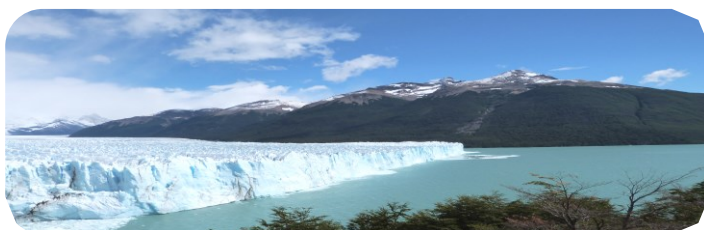
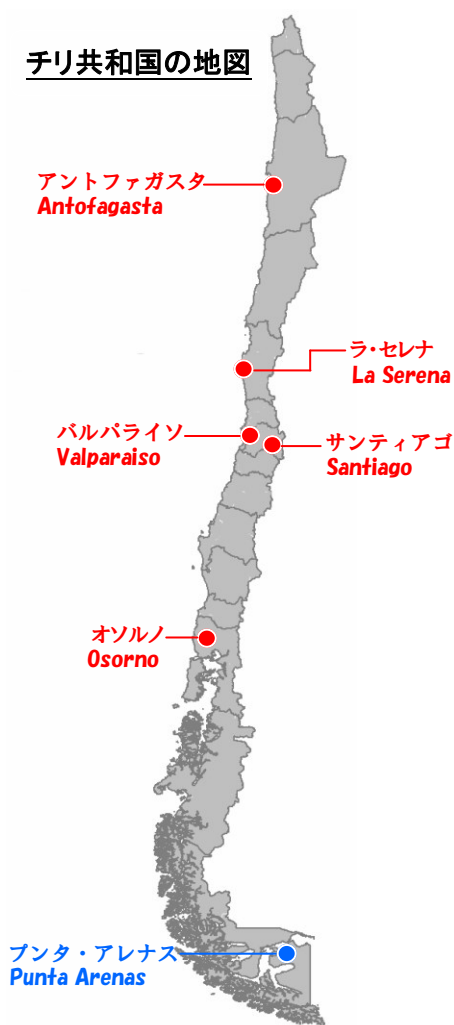
ご挨拶	1
PRENECの進捗状況	2
Staff	
(小田柿助教)	4
プロジェクトセメスター	5
学生チリ滞在記	6
LACRC活動報告	9

PRENECの進捗状況

LACRCのメインミッションである大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。このプロジェクトでは、現在第5州バルパライソ、第12州プンタ・アレナス、首都州サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査(iFOBT)を用いた検診プログラムが進行中です。また第4州ラ・セレナ(コキンボ)、第10州オソルノにおいても近く検診が開始される予定です。

プンタ・アレナス出張

チリ共和国の地図



第12のプンタ・アレナスは疫学的に大腸癌の発生率が高いため、予防に対する意識も高い地域の一つです。基幹病院であるマガジャネス病院ではPRENECの第一陣として2012年5月より活動が開始されました。LACRCからも積極的にスタッフを派遣しサポートを続けて参りました。その結果、大腸癌の早期発見や内視鏡切除においてこれまでも良好な成績を残しております。

今回は2014年11月にLACRCから樫教授、岡田助教が同院に出張し、大腸内視鏡検査の指導や実演を行いました。

今後も引き続き現地病院との協力を続けていく予定です。



内視鏡検査を行う岡田助教

サン・パブロ・コキンボ病院病理医の研修を実施

第4州ラ・セレナ市およびコキンボ市は、サンティアゴから飛行機で北へ1時間ほどの海岸沿いに位置するいわゆる双子都市で、両市併せて人口約40万を擁するグレーター・ラ・セレナと呼ばれる都市圏を形成しています。両市は本年1月にPRENECへの参加を正式に表明し、CLCおよび本学との間で協定を締結しました。PRENECの拠点病院となる予定の公立サン・パブロ・コキンボ病院では、現在PRENEC開始に向け各部門において準備が進められています。病理部門ではマダリアガ病理部長が病理検体の日本式取り扱いや病理診断基準などを学ぶため、10月20日～24日の5日間にわたり、CLCのLACRCオフィスにて研修を行いました。研修では、河内講師が大腸・胃・食道早期病変の病理を中心にレクチャーを行い、実際のPRENEC症例を顕微鏡で観察しながら診断基準について討論を行いました。1週間のマンツーマン研修であり、マダリアガ医師も大いに収穫があったと満足していました。

このような研修は、LACRC赴任病理医の重要なミッションになり得ると考えますが、現在のところ残念ながら1年に1人程度しか希望者が現れません。今後プロジェクトの進展と共に、このような機会が増加することを願います。



研修終了後、マダリアガ医師(写真:左)との記念撮影

サン・ボルハ病院での大腸内視鏡トレーニング

チリ国内の大腸内視鏡検査施行医師を増員するため、2013年10月よりサンティアゴ、サン・ボルハ病院にある日智消化器病研究所で大腸内視鏡トレーニングコースが開設され、LACRCの医師が中心となって指導を行っております。

今季はサン・ボルハ病院外科よりゴンサロ・ロス医師が本コースに参加され、3か月に渡って大腸内視鏡の安全な挿入法や病変の発見、内視鏡治療に関する指導を受けました。

今後もPRENECにおける内視鏡医不足を解消すべく、LACRCスタッフが積極的な協力と提言を行い、更に高度で効率的なトレーニングプログラムの遂行に励んで参ります。



研修中のロス医師(中央)と、指導に当たる樫教授、岡田助教

Staff

内視鏡部門に新たに2名のスタッフが加わりました。2014年9月に、椿昌裕教授、11月に小田柿智之助教がLACRCに着任いたしました。PRENECでの大腸内視鏡検査を中心に活動をして参ります。

着任挨拶

小田柿 智之 LACRC 消化器病態学分野

2014年11月20日より、東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点(LACRC)に内視鏡医として着任いたしました、小田柿智之と申します。私は、2003年に東京医科歯科大学を卒業後、消化管内視鏡検査研修のため、国立がん研究センターの消化管内視鏡科に所属し、内視鏡診断・治療に従事しておりました。

消化管内視鏡の分野において日本は世界の最先端を走っており、私がこれまでに経験してきたことや身に着けた知識・技術を私にとっては未知の地である南米に広めることができる可能性がある本プロジェクトに多大な意義を感じ、参加させて頂いた次第であります。

そういった理想を持って赴任いたしましたが、着任後1ヶ月程度の現在では内視鏡自体のみならず、治療に要する周辺機材機種の相違や不足、スペイン語での意思疎通の問題などが障害となりなかなか一筋縄ではいかないと実感しております。

一方で、私が主に指導に当たるサンボルハ病院で内視鏡的粘膜剥離術:ESD実践の可能性が出てきたり、CLCでの研究会の発表後に他施設の内視鏡治療に対して意見を求められたりと、少しずつですが自分の経験が活かされているという実感もあります。

前任の先生方の御尽力のお陰で大腸癌検診の症例の蓄積が順調に進む中、内視鏡治療の指導・普及にも貢献できればと思っております。

実際に現地でないと分からない状況や問題点などを少しずつ乗り越え、本プロジェクトがより良い状況に進むよう努力していきたいと思っております。今後とも宜しくお願い申し上げます。



小田柿助教(LACRCオフィスにて)



CLCにおける学会にてプレゼンテーションをする小田柿助教

プロジェクトセメスター

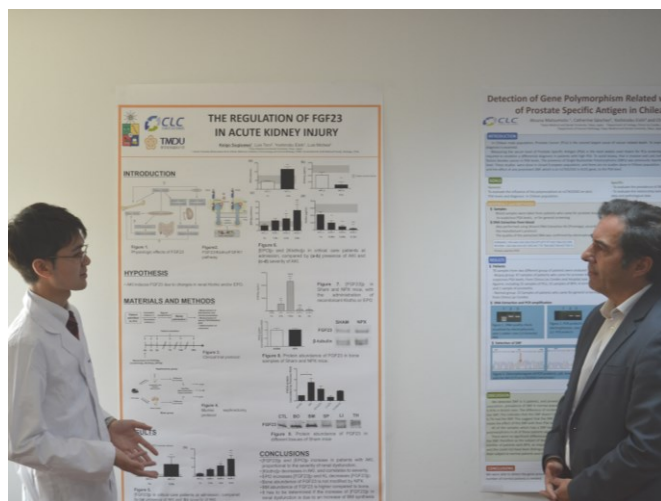
派遣学生の最終研究発表会を開催

本学医学科4年次の学生を対象とした基礎研究体験プログラム「プロジェクトセメスター」では、毎年チリに4～6名の学生を派遣しています。本年も、6月9日から11月15日までの約5ヶ月間、6名の学生がチリに滞在しました。6名のうち、3名はチリ大学医学部の研究室に、3名はCLCの研究室に配属され、指導教官であるチリ人研究者のもとで研究活動に従事しました。

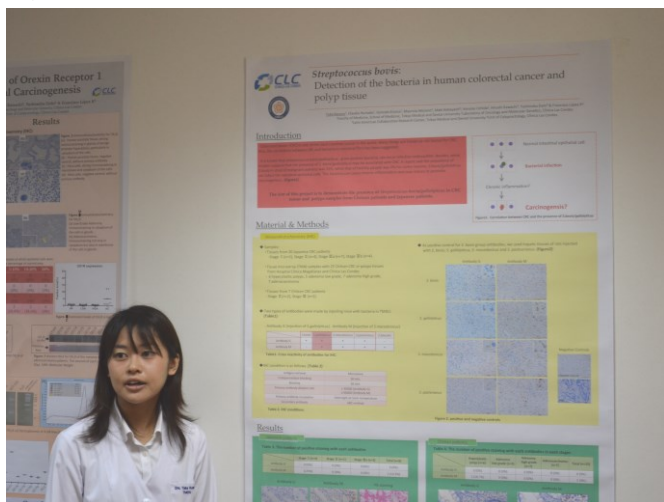
研究テーマは配属研究室により様々で、また研究室の規模、指導体制、設備等も異なるなか、本年度の派遣学生達は皆、与えられた環境の中で最善を尽くして研究に取り組んだようです。短期間の研究体験というプログラムである以上、当然ながら満足いく結果が得られた学生もいれば、期待通りに研究が進まず苦戦した学生もいましたが、そのいずれも学生達にとっては将来の糧となる大変貴重な経験であったに違いありません。また、研究体験のみならず、スペイン語を母国語とするラテンアメリカでの日常生活、チリ人との交流、ラテンアメリカの大自然や歴史・文化に触れること、そのどれもが刺激的な経験であったであろうと思います。LACRCでは期間中、定期的に研究進捗ミーティングを開催し、彼らの研究が順調に進むようサポートを行って参りました。10月23日には最終発表会が行われました。帰国後に本学で行われる実際のポスター発表会を模した形式で、各学生とも入念に準備し発表に臨みました。指導教官らからの質問等にも的確に堂々と答える学生達の姿を見て、大変嬉しく思いました。学生達は11月15日に帰国の途につきましたが、この貴重な経験を活かし、彼らが将来国際的に活躍する人材に成長してくれることを願います。



発表会の冒頭で、スピーチをする樺特任教授



オンライン教授と討論する杉澤啓吾さん



プレゼンテーションをする笠野由佳さん



最終発表会后、CLCにて指導教官らと記念撮影

プロジェクトセメスター学生チリ滞在記

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を5カ月間にわたってチリの研究機関へ派遣しており、LACRCでは、彼らの研究・生活のサポートも行っています。本年度も6月9日に6名の学生がチリに到着し、うち3名がCLC、3名がチリ大学の研究室に所属しました。本号では、チリ大学の研究室にて研究する派遣学生のチリ滞在記をお届けいたします。

チリでの経験

杉澤啓吾 チリ大学医学部統合生理学研究室所属

プロジェクトセメスター期間中チリ大学に派遣して頂いた杉澤啓吾と申します。この場をお借りして私のチリ滞在記を書かせて頂きます。

まず研究について紹介します。私はミチエア教授の統合生理学教室に所属し、腎障害と関連するタンパク質FGF23について研究を行いました。指導教員のトロ先生からは基本的な知識や手技を教わったほか、実験計画の相談を行いました。トロ先生は非常に英語の堪能な方で、とても速いスピードで話されます。最初は先生の言葉を聞き取ることに必死でしたが、徐々に会話のペースに慣れ、こちらから積極的に発言もできるようになりました。説明を受けたときは理解できたことを反応によって示したり、疑問を持ったらずぐに質問したりすることが大切だと感じました。

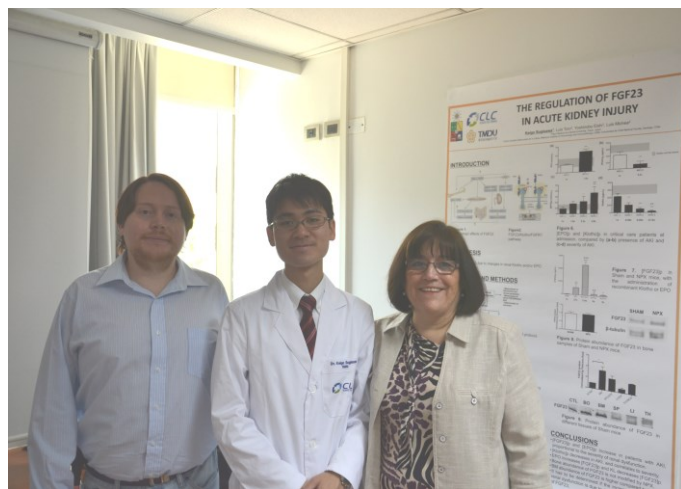
また、教授のミチエア先生からは様々な助言を頂いていました。私がトロ先生と共に教授に報告や相談をしに行くこともありますが、教授は普段から研究室の様子を見て回り、「やあ、研究はどう？」と私を含めた研究室のメンバーを気遣って下さいました。また、研究室の方々には機械の操作や実験の注意点などを私に親切に教えて下さっただけでなく、気さくに話しかけて下さいました。充実した環境で研究に打ち込むことができ、非常に感謝しています。



研究室メンバーの方々

次にチリでの滞在中に感じたことについて書きます。日本とチリの文化には様々な違いがありますが、多くの場合日本とチリのどち

らが良いとはっきり言えるものではなく、違いを知ること自体がとても興味深いと私は考えています。自分では予想もしなかったことを知ったり経験したりすることは何度もありました。そうした体験が、無意識のうちに凝り固まっていた自分の頭をほぐしてくれたように思います。異文化の中に身を置くと、よく言われる「郷に入りては郷に



最終発表会后、研究室メンバーのトロ医師、ゴンザレス医師と

従え」はやはり重要な教訓でした。ただし、グローバル化が進む現代では、「郷」の側の人間にも異文化を受容する姿勢が必要となるのではないのでしょうか。日本に戻り「郷」の側になってもチリでの経験を忘れず、興味を持って異文化を受け入れる心構えを持ち続けたいと強く思いました。

最後に、私の留学を可能にして下さった江石教授をはじめTMDUとチリ大学の教職員の方々とLACRCの皆様には厚く御礼申し上げます。多くの方々のご支援により、研究とチリでの滞在を満ちるものにすることができました。ありがとうございました。



研究員の方が描いて下さった私のイラスト

5ヶ月半のチリ滞在を 終えて

佐々木愛 チリ大学医学部微生物学研究室所属

2014年度プロジェクトセメスターにおきまして5ヶ月半チリに派遣させていただきました医学科4年の佐々木愛と申します。帰国してからあっという間に1ヶ月が経とうとしております。時の流れるはやすさに焦燥感に駆られる日々です。

このプロジェクトセメスター期間において、私はチリ大学微生物学分野の小児感染を専門とする研究室において、無症候児におけるピロリ菌の感染に関する研究に携わりました。当初はもっといろいろな実験に手を出せたらと思っていました。しかしながら小さなテーマであっても自分で計画を立てて結果を出してまとめる、というところまで仕上げるのは意外と時間も労力も必要なであることが実感でき、機械の数の問題や治安の関係で活動時間も制限される関係上、現実的には最初考えていたほど楽に全てを進めることは難しかったです。研究室の雰囲気は和気あいあいとしていて、英語を話せる方々がほとんどという恵まれた環境でしたので日常の意思疎通にはさほど苦しまずに済んだのではないかと思います。

チリ人はどのような国民か、と問われるとまず頭に浮かぶのは「情に篤い、親切」ということです。サンティアゴ市内の公共交通機関を使っていると、老人や妊婦、幼子を連れた人、障害者、怪我人など、弱者ともいえる立場にある人々に対して積極的に席を譲る人々の姿を頻繁に目にしました。小さい時からこのような環境で過ごしているからなのか、素敵な習慣だと思いました。このようなプラスの面がある一方で、特にプライベートにおいて時間に寛容すぎる点などのマイナスな面があるのも事実です。教授とお話していた時に話にのぼったのは、チリでは色々な分野・資格の名前の後ろに“engineering”をつけたがるという形式主義や、肩書きだけで実際の能力が伴っていない資格などもあり、プロフェッショナリズムに対する意識が低いことも国の抱える問題だということでした。

スペインの植民地であったチリの公用語はもちろんスペイン語。新しく言語を学ぶのはやはり大変で、幼い頃の学習能力があったら、と何度思ったかわかりません。期待していたほどには話せるようにはなりませんでしたが、英語や第2外国語で選択していたフランス語と文法や単語などを比較すると、その共通点や相違点が見えて興味深かったです。今後も細々とでもよいので勉強できたらと思います。

最後になりましたがこの場をお借りいたしまして、派遣に際し多大なるご尽力いただきました人体病理学分野の江石教授、チリにて公私共に大変お世話になりました河内先生、小林先生、JaimeさんをはじめとするLACRCスタッフの皆様、CLC・チリ大学の先生方、その他お力添えいただきました全ての方に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



研究室メンバーとの昼食会にて



Los Dominicosにある民芸市場にて



O'Ryan担当教官と

チリ留学を振り返って

宮岡双葉 チリ大学医学部男性病学研究室所属

こんにちは、チリ大学医学部・男性病学研究室に所属した、医学科4年宮岡双葉です。今回は私が参加させて頂いた研究と学会についてご報告したいと思います。

まず研究についてですが、私は「前立腺がん幹細胞のStemness遺伝子をノックダウンさせた際の、抗がん剤へのアポトーシス感受性はどのように変化するか」というテーマのもと、免疫染色やウェスタンブロットを用いて研究しました。

私が医科歯科大学からの受け入れ学生第1号ということで、研究室の方々は、研究面のサポートは勿論、普段からお昼と一緒に食べたり、誕生日を祝ってくれたり、私のチリ生活が楽しくなるようにと多大な配慮をしてくださいました。また実験の合間には日本の文化やサブカルチャーの話を興味津々で聴いてくれたり、東日本大震災のことを心配してくれたり、日本への強い関心が伺えました。

9月には、チリ南部にあるバルディビアで開催されたリプロダクションに関する学会に研究室で参加してきました。リプロダクションということで、必ずしも前立腺がんがメインテーマではなかったのですが、様々な方々のプレゼンテーションやポスターを見ることができました。研究室の方もポスターを出展していたので、ポスターをまとめる際のポイント等も教えてもらったりしました。

また、学会の合間にバルディビアの観光もできました。バルディビアはチリ人曰く「チリで最も美しい街」と評されるのですが、確かに大きな河川を有し、緑豊かな土地でした。バルディビアにはアウストラル大学キャンパスがあるのですが、この大学の植物園は非常に有名でした。川が流れ、木が生え、美しく苔むした植物園が素晴らしかったです。学生が思い思いにリラックスして勉強していたり、談笑をしており、日本の大学ではなかなか味わえない雰囲気でした。大気汚染に悩む首都サンティアゴとは全く異なる美しい自然を堪能でき、国土が南北に長い故のチリ国内の気候・自然の違いが実感されました。

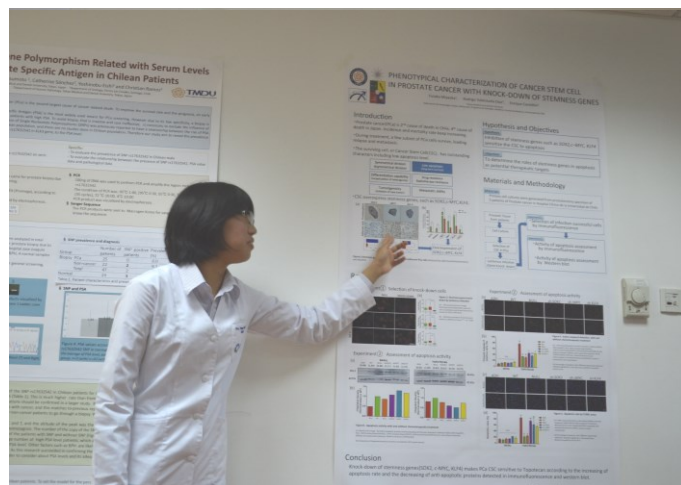
最後になりますが、この素晴らしい留学の機会を与えてくださった江石教授をはじめとする医科歯科大学の関係者の皆様、チリでの生活を支えてくださった河内先生やJaimeさん、私を受け入れてくださったチリ大学の先生方、すべての皆様に感謝申し上げます。



研究室の方の家でのホームパーティー



アウストラル大学の中の植物園の様子



プレゼンテーションの様子

LACRC活動報告

本学名誉・特任教授の水澤英洋先生が チリをご訪問

現国立精神・神経医療研究センター病院長、本学名誉・特任教授の水澤英洋先生が、第69回チリ神経・精神・脳神経外科学会でご講演されるため、2014年10月7日から10月13日にチリをご訪問されました。10月11日にはサンティアゴでLACRCスタッフとご面会され、スタッフからチリ拠点の現状と展望をお伝えし、水澤教授からは激励のお言葉を頂戴しました。

2015年には第22回世界神経学会がサンティアゴで催され、更に2017年に日本で開催される第23回世界神経学会では水澤教授が会長を務められる予定です。神経内科領域でも日本とチリとの友好関係が発展することが期待されます。



LACRCオフィスにて(右: 水澤英洋教授、左: 椿昌裕教授)

本学腎泌尿器外科より、藤井准教授、伊藤助教が チリをご訪問

9月28日から10月3日、本学腎泌尿器外科より藤井靖久准教授、伊藤将也助教が、CLC泌尿器科ラモス医師のご招待によりチリをご訪問されました。CLCおよびチリ大学では手術や病棟、カンファレンス等をご見学されました。藤井先生は本学腎泌尿器外科で独自に開発されたロボサージャン・ガスレス・シングルポート手術に関する講演を各施設で行い、低侵襲、炭酸ガス不使用などの観点からチリ人医師達より高い関心を集めました。

また、同時期にプロジェクトセメスターを通じてCLC泌尿器科に派遣されていた本学医学科4年生、松本惇奈さんの研究状況や発表も視察されました。



CLCで講演を行う藤井靖久准教授

慶應義塾大学によるLACRC・CLC視察

本学チリ拠点は2010年に設置され、現在までに計8名の職員（医師・研究者）が赴任し勤務してきました。本学の海外拠点活動はニュースレター等で対外的に広くアピールされ、本邦においては大学のグローバル展開の1モデルとして高い評価を受けております。

我が国の現政権の方針と相まって、大学のグローバル化が重視される中、海外拠点設置に積極的な大学が増えており、本学の海外拠点活動は益々注目されているようです。この度、慶應義塾大学より、川田孝征氏、高嶺幸子氏、田中英雅氏の3名が来智され、CLCおよびLACRCオフィスの見学や、海外拠点運営に関する意見交換をLACRCスタッフと共に行いました。LACRC開設当初に苦労した点や、拠点運営のメリット・デメリット、理想とすべき人員体制などについて、現場ならではの忌憚りの無い意見交換が行われました。

今後は本邦の大学・研究機関がセクショナリズムに別れを告げ、協力し合い、効率的なグローバル展開を実現することが必要となるでしょう。まだ4年あまりとはいえ、本学拠点活動において蓄積された経験が後続の成功に寄与することを願います。



プレゼンテーションをする河内講師



ミーティングが終了後、慶応大学の方々とともに記念撮影

編集後記

ついに大晦日ですね。サンティアゴ・東京間の時差は12時間ですが、毎年12月31日には、世界のどこにいても時を同じくした祝典が開かれます。チリではこの時期になると、都市で暮らしている人々が田舎に帰り、普段は離れて住んでいる家族が一室に集まり、それからパーティーを催し、ダンスをしながら楽しい時間を過ごすのが最も一般的な習慣です。今後もLACRCスタッフの活動及びPRENECの進捗状況を本Newsletterを通じて、ご報告してまいります。（ウレホラ・ハイメ）

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 16, December 2014

〔発行日〕2014年12月31日

〔制作〕Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: jurrejola@clc.cl

Newsletter

No. 17 March 2015

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

政治問題と山火事

2度目のチリ赴任以来半年が過ぎようとしています。この間にチリでは大きな政治問題が発生しています。一つはPENTAという銀行が関連した政治献金問題、もう一つはBachelet大統領の息子夫妻による資金洗浄疑惑です。どこの国でも似たようなものだと思っていましたが、今後の展開次第では大統領の責任問題にも発展するかもしれません。チリでは日本のように簡単に国のトップが代わるような事態は起こりえないようですが、大統領支持率は大きく減少しました。現在南米ではチリ、アルゼンチン、ブラジルの主要3か国で女性大統領が就任していますが、これで3人とも大きな問題を抱えることとなりました。

夏の間気温が30度を超えることが多かったのですが、チリ各地で山火事が多く発生しました。最近では国会が所在し、立法首都であるValparaíso市近郊で大規模な山火事があり、昨年に続いての出火に消防士の奮闘ぶりや住民避難の様子が報道されました。私の実感では21年前より湿気が多くなったと感じていましたが、たばこのポイ捨てや、ごみ焼却などの影響もあるようです。

Valparaísoは太平洋の宝石とも称された美しい街で、2003年に街並みが世界遺産に指定されています。近郊に保養地、リゾート地であるViña del Marもあり、夏の休暇期間中はチリ国内はじめ、南米各国から多数の旅行者が訪れます。若者も多く集まり、夜間は危険な地域が増えたようですので、旅行の際には十分な情報収集が必要です。

このニュースレターが発行される頃には河内講師、岡田助教が任期を終了され帰国されます。河内講師は3年間、岡田助教は2年間LACRC業務に従事されましたが、帰国後のご活躍を心から祈念しています。

椿 昌裕



バルパライソの街並み

LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENEC最新情報	2
エクアドルプロジェクト	4
LACRC活動報告	6
離任の挨拶	7

PRENEC最新情報

ラテンアメリカ共同研究拠点 (Latin America Collaborative Research Center、以下LACRC) のメインミッションであるPRENECの最新情報をお伝えいたします。PRENECでは現在、2012年よりマガジャネス病院(ブントアレナス市)とエドワルド・ペレイラ病院(バルパライソ市)、2013年よりサン・ボルハ・アリアラン病院(サンティアゴ市)の3拠点が稼働しており、今年度からはサン・パブロ・デ・コキンボ病院(コキンボ市)とバセ・デ・オソルノ病院(オソルノ市)の参加決定、またアントファガスタ病院(アントファガスタ市)の参加が見込まれています。

PRENECコーディネーター専任病理医勤務開始

本学は、JICA支援下の日本における研修会(早期食道・胃・大腸癌の病理組織診断)を通じて、中南米地域の医師の人材養成に協力してまいりました。本号では1997年この研修に参加して3月よりPRENECのコーディネーター専任病理医として就任したペニャローサ医師にご寄稿いただきました。

パウリーナ・ペニャローサ医師

サンティアゴ・オリエンテ・ドクトール・ルイス・ティネス病院病理部 副部長

私が1997年にTMDUを訪れてから長い時間が過ぎましたがそのでの経験は今でも鮮明に思い出されます。約3カ月間の日本滞在中に「早期食道・胃・大腸癌の組織診断」のコースに参加しましたが、もともと私の病理医としての研修先は日智消化器病研究所という既に日本と強い繋がりを持ったサン・ボルハ病院であった為日本の概念を取り入れることができ、サン・ボルハ病院での研修が終わるとともにJICAを通じた貴学における研修会への参加が具体化しました。講義と実習で二部構成されていたこの研修には中南米の9名の病理医が参加し、最初の研修はTMDUにおいて中村恭一教授(当時)のコーディネーターのもと江石義信先生、河野辰幸先生、清成秀康先生、工藤進英先生、小池盛雄先生、下田忠和先生、渡辺英伸先生他偉大な先生方より講義を賜ることとなりました。その後グループに分かれ異なる施設に送られましたが、私は他の医師と共に幸運にも都立駒込病院の小池盛雄先生のもとで実習するチャンスに恵まれました。実習においては夜遅くまで取り組むこともありましたがそんな時は小池先生が常に気にかけて帰り道を送ってくださいました。先生方は大変親切で教育者としても素晴らしく特に中村先生、小池先生は常にコミュニケーションを図って配慮いただきこの数カ月は生涯忘れ難いものです。また滞在中には現在もTMDUとつながりの深い外国人研修者であるパラ医師とフェノッキ医師ともここで知り合うこととなりました。チリに帰国してからは公立のソテロ・デル・リオ病院とサン・ボルハ病院の2施設において日本で学んだ経験や知識を大いに活かしながら学会参加や論文発表に励んでおります。現在はサンティアゴ・オリエンテ・ドクトール・ルイス・ティネス病院にて婦人科分野、腫瘍学分野を中心に取り組んでおりますが、消化器分野も変わらず堅持しております。

数カ月前フランシスコ・ロペス医師より今回のPRENECプロジェクトの参加依頼を受けました。我が国の健康増進にとって大変重要で意義のあるプロジェクトのメンバーの一部として活躍できることは名誉なことであり、TMDUとの繋がりを持つこのプロジェクトに貢献したい所存であります。

最後に、世界中の医師に素晴らしい機会を与えてくださったTMDUの先生方に深甚なる敬意と感謝を申し上げます。(翻訳: 早川)



略歴:

1993年チリ大学医学部を卒業。1997年以降病理医として研修を積む。その後サン・ボルハ病院等での勤務を経て、2008年サンティアゴ・オリエンテ・ドクトール・ルイス・ティネス病院の病理部副部長に就任。



1997年小池盛雄先生と記念撮影

第三回エクアドル日本・大腸病変講習会開催

本年2月24日から2日間にわたって、エクアドル・キトにおいて内視鏡技術および病理診断技術の指導を目的とした「第三回エクアドル日本・大腸病変講習会(Tercer curso ecuatoriano-japonés de lesiones colorrectales)」が開催され、LACRCより椿教授(内視鏡分野)、河内講師(病理分野)、小田柿助教(内視鏡分野)3名が講師として参加しました。

内視鏡分野においては、椿教授による「日本の一地方病院における大腸癌検診結果」、「早期大腸癌の内視鏡診断及び治療」の講演と、小田柿助教からは「大腸内視鏡」、「大腸ESDの実際」のそれぞれ2講演ずつ行われ、両日にわたり大腸内視鏡検査のデモンストレーションを実施しました。また病理診断分野においては河内講師より「チリ・大腸癌検診プロジェクトにおける病理学的解析結果」、「胃生検の病理診断」の2講演と顕微鏡によるディスカッションを担当し、最終日、椿教授、河内講師、小田柿助教が中心となって行われた大腸病変の症例検討会では参加者からも活発なディスカッションが行われ大盛況のうちに閉会となりました。

今回講習会参加者は、大腸癌検診プロジェクトの拠点である国立パブロ・アルトゥロ・スアレス病院の内視鏡医・病理医・技師のほか、本プロジェクトへの参加を検討している他の公立・準公立病院の内視鏡医・病理医をあわせ約80名程でした。



板垣参事官による開会式の挨拶



内視鏡トレーニングの様子



現地スタッフとの記念撮影



講演中の椿教授



講習会ポスター

エクアドル保健省・在エクアドル日本大使館表敬訪問

LACRCスタッフは2月26日、在エクアドル日本大使館板垣参事官とモンタルボ医師と共にエクアドル保健省を訪れ、アクリオ副保健大臣、ロドリゲス次官との面会をもちました。アクリオ副大臣からはエクアドル大腸癌検診に対するこれまでの本学の貢献に多大なる感謝の意を表明され引き続きの支援を強く希望されました。また、現在エクアドル保健省では大腸癌のみならず、胃癌や子宮頸癌といった他の癌についても検診を整備したいと考えており本学の方式に関心を示されました。

夕刻からは在エクアドル日本大使館へと場所を移し、エクアドル側からはモンタルボ医師に加えヴァカ医師、メヒア医師らと共に会談を行いました。板垣参事官からは今後も継続的な支援が続くよう在エクアドル大使館からもできる限りの協力をしていくとの表明がありました。



エクアドル保健省前にて



エクアドル独立記念碑前で記念撮影

《エクアドル保健省ホームページに今回の本学の取り組みが掲載》

■ Ecuador aliado con Japón, para vencer el Cáncer y las enfermedades digestivas

Publicado el Jueves, 05 Marzo 2015 19:40 | Visitas: 99



Como parte de un Memorando de Entendimiento firmado entre el Ministerio de Salud Pública (MSP) y la Universidad Médica y Dental de Tokio (TMDU), por sus siglas en inglés, en el Hospital Pablo Arturo Suárez se desarrolló el Tercer Curso Ecuatoriano Japonés de Lesiones Digestivas, dirigido a cerca de 80 profesionales entre endoscopistas, patólogos, oncólogos y cirujanos, el 24 y 25 de febrero.

El taller estuvo a cargo de profesores japoneses y tiene como objetivo realizar una capacitación técnica y práctica al personal médico en detección, diagnóstico y tratamiento de las lesiones digestivas tumorales en fases tempranas, cuando todavía son curables.

Mediante este taller el MSP fortalece las capacidades del talento humano de los establecimientos de salud del Ecuador, en el marco de las acciones de prevención primaria y secundaria de cáncer colorrectal, y pone a disposición de la población ecuatoriana esta conducta sanitaria preventiva para detectar oportunamente una lesión colorrectal maligna.

En el mes de agosto del 2012 se firmó un Memorando de Entendimiento entre el Ministerio de Salud Pública (MSP) y la Universidad Médica y Dental de Tokio (TMDU), por sus siglas en inglés, con la finalidad de implementar el tamizaje de cáncer colorrectal (CCR) en Ecuador.

Este proyecto piloto se ha desarrollado en el hospital "Pablo Arturo Suárez", y es coordinado por la Subsecretaría Nacional de Vigilancia de la Salud Pública, a través de la Dirección Nacional de Estrategias de Prevención y Control.

El tamizaje consiste en hacer una prueba de sangre oculta en las heces fecales; los pacientes que presentan resultados positivos deben realizarse una colonoscopia para la detección de las posibles lesiones. Se realiza una biopsia y el estudio correspondiente.

Actualmente en Ecuador la mayor parte de las lesiones colorrectales se detectan en estadios avanzados. Sin embargo, siguiendo los protocolos del tamizaje recomendados por los profesionales del Japón, se logra la detección temprana y se pueden realizar las intervenciones necesarias para salvar la vida o generar una mayor expectativa de vida del paciente.

Para Ecuador, es importante la cooperación de países como el Japón en las investigaciones sobre el cáncer, ya que ese país tiene la esperanza de vida más alta del mundo. A pesar de las altas tasas de cáncer que registra dicho país, ha sabido canalizar sus recursos y capacidades para implementar estrategias preventivas de las neoplasias digestivas, disminuyendo la incidencia y mortalidad de algunos tumores malignos.

癌と消化器病変の克服に向けてエクアドルと日本の提携

“エクアドル国保健省・東京医科歯科大学間で2012年8月に締結された覚書に基づき本年も2月24・25日にパブロ・アルトゥロ・スアレス病院にて第三回エクアドル日本・大腸病変講習会が開催されました。

中略

現在エクアドルでは結腸直腸病変の多くが末期のステージで発見されています。しかしながら日本の専門家が推奨する検診システムを導入し始めたことで早期発見・治療が可能となり、検診を受けた患者の予後の改善に寄与することができました。

エクアドルにとって日本のような世界一の長寿国であり癌研究に取り組んでいる国の協力は大変重要であります。日本は癌発生率の高い国として知られているにもかかわらず、消化器癌による死亡者数抑制の政策に重きを置くことで悪性腫瘍の発生率や死亡率の減少に繋がっています。”

(翻訳: 早川)

活動報告

サンチャゴ日本人学校中学部による職場訪問

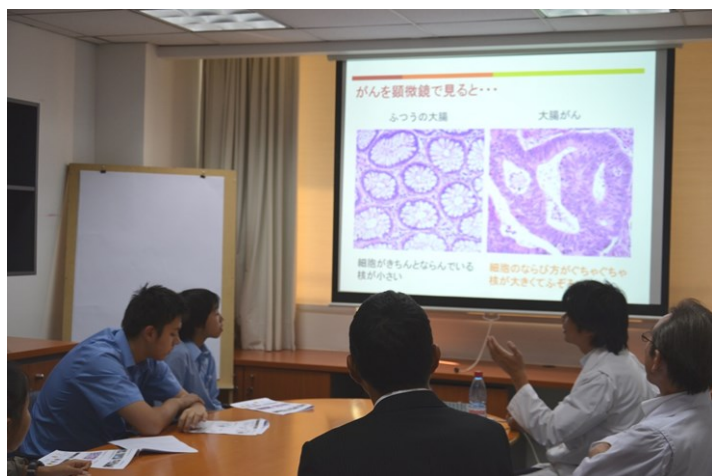
サンチャゴ日本人学校からの要請により2年に1度の職場訪問が本年2月11日に行われました。当日は、中学部の生徒5名が、椿教授、岡田助教、小田柿助教の勤務するサン・ボルハ病院日智消化器病研究所を訪問し内視鏡室にて内視鏡の見学を行いました。またCLCにて河内講師によるチリにおける本学の取り組みや、医療職のキャリア、チリの癌の特色や癌細胞の病理標本の紹介の後、CLC内の救急外来やヘリポートを見学しました。学生の中には将来医師になることを志願している生徒もあり今回の職場訪問を通して貴重な体験ができたコメントもあり有意義なものとなりました。LACRCスタッフは今後も積極的に見学体験学習に貢献して参ります。



椿教授による内視鏡の紹介(サン・ボルハ病院)



CLC救命救急士による救急車内の説明



河内講師による病理診断の紹介(CLIC)



CLCヘリポートにて記念撮影

Staff

2012年3月より約3年という赴任医師の中でも最長の期間において病理診断研究やPRENEC、JDP、エクアドル、ブラジル、パラグアイの各プロジェクトへの取り組みに深く携わった河内講師と2013年から2年間CLCや保健省直轄サン・ボルハ病院にて内視鏡の臨床指導に取り組んできた岡田助教が任期満了の為3月に離任されることになりました。

離任挨拶

河内 洋 LACRC 人体病理学分野

2015年3月17日、まだ晩夏の強い陽射しが照りつける夕刻、お集まりくださったLACRCスタッフやチリで親交のあった在留邦人の皆様に見送られながら、住み慣れたアパートを後にし家族と共にサンティアゴ空港に向かいました。思い返せば初めてサンティアゴ空港に降り立ったのも3年前の同日であり、「3年と1日」のチリ駐在生活を送ったことになります。現在は3年ぶりの日本の桜を感慨深く眺めながら、数奇な運命ともいえる我が家のチリ生活を振り返っているところです。

LACRCのメインミッションである大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)においては、日本の質の高い大腸内視鏡挿入・診断技術の導入がチリ側から最も期待されていた点であり、本学からLACRCに派遣された歴代の外科医・内視鏡医達は、チリ側の受け入れ体制が決して十分とは言えない状況の中、存分に持てる技術を発揮し、チリ側の期待に応えてきました。プロジェクトは道半ばではありますが、その点においては「チリにおける大腸癌死亡率低下」という最終目標へ着実に向かっているといえるでしょう。一方、病理分野に関しては、日本の蓄積された知見に興味を示すチリ人病理医が少なく、如何にして彼らに我々の経験を理解してもらうか、というのが大きなテーマとなっていました。前任であった伊藤助教の尽力で状況は随分改善されましたが、その後の展開という意味においては私自身の力不足のために、十分な結果を出すことができず、その点については反省しております。しかし一方では、国民性や言語の異なる中、自分なりに最善を尽くしたという思いもあります。

「長い目で見れば人生には無駄がない」と言います。研究留学でも無く、海外で3年間過ごすことは、私たちのような職種では大変に珍しいことですが、南米のチリにて勤務するという希有な経験を積むことができました。私の赴任に伴い、思いがけず見知らぬ異国で生活することになった運命を受け入れてくれた妻や子ども達にも感謝していますし、彼らにとっても、かけがえのない貴重な経験になったと確信しています。

チリでの3年間、チリ人や在留邦人との出会い、南米大陸の大自然や異文化の経験など、良き思い出は沢山ありますが、一方で異国の地で思い通りに行かないことに対する苦悩や、外国人としての身の置き所の無い思い、人々との軋轢などを経験することも少なくなく、チリ人や彼の国に対して否定的な印象を持ったこともあります。しかし

のような負の部分は、日本で暮らしていても経験することであって、それは私が3年間という長い間地に足をつけてチリに生活していた証であり、数週間程度の滞在では決して味わうことのできないものだったのだと思われるのです。そのように考えるとき、否定的な気分はもはや無く、むしろチリで出会った友人達の温かな心や、良い思い出ばかりが思い出されます。またエクアドルプロジェクトへの協力においても多くの信頼できる人達と出会い、共に仕事することができた幸運にも恵まれました。

帰国後は、本来の専門分野である病理診断の現場に戻ります。今後、中南米への医療協力に直接携わることはおそらくありませんが、そのような運命が再び訪れる日まで、日本の現場から静かに見守りたいと思います。LACRCの益々の発展、チリやエクアドルのプロジェクトの成功を心より祈念するとともに、私の赴任中、同僚として苦楽を共にし、公私ともに支えて下さった津野里枝子さん、ハイメ・ウレホラさん、早川美貴さん、小林真季先生、岡田卓也先生、田中浩司先生、小田柿智之先生、椿昌裕先生に深謝しつつ、欄筆といたします。



LACRCオフィス前にて左よりハイメ、小田柿助教、椿教授、河内講師、早川

離任挨拶

岡田卓也 LACRC食道・一般外科学分野

2013年4月からLACRCに赴任し、ちょうど2年の任期で本年3月に離任することになりました。任期中はチリで大腸癌検診が始めるにあたり、現地医師や政府に対して主に内視鏡関連の提言や指導を行って参りました。業務の中で最も印象に残っているのは、チリに到着して間もなく、2013年6月から首都サンティアゴで大腸癌検診が開始され、多数の参加者が押し寄せて目まぐるしく忙しかったことをよく覚えています。現地では検診について未経験なスタッフばかりで、私もまだチリでの生活に慣れておらず、時には夜遅くまで皆で悪戦苦闘して乗り切ったことも、今では良い思い出です。その甲斐あって、徐々に検診の良好な成績が出始めており、私の活動もチリの健康増進に少しは貢献できたのではと考えています。

振り返ってみると、正直なところ仕事も日常生活もうまくいくことばかりではありませんでした。環境が大きく変わり、言葉や文化の壁に悩まされ辛い日々もありましたが、検査の度に患者さんから「わざわざ日本から私達のために来てくれてありがとう。これからも頑張って」と声を掛けてもらい、勇気づけられた気がしました。いつも周囲のチリ人、現地日本人の方々に助けられながら、何とか大きな問題なく任期を終えることができ、お力添えを頂いた皆様には感謝の念に堪えません。

海外での医療活動は私にとっては初めてのことで、とても良い経験になりました。世界に目を向けることで、日本の医療をこれまでと違った視点で捉えることができるようになったと感じています。その他にも、チリを公式訪問された安倍昭恵総理夫人と懇談する機会を頂いたり、チリ政府の要人と面会したりと、日本では得難い体験もすることができました。本学よりこのような機会を頂いたことにとても感謝しております。

LACRC内視鏡部門は更に2人の新しい先生方が赴任され、今後活動は発展を続けるものと信じております。私自身もまたチリでの経験を活かし、今度は日本医療の発展のため更に邁進して参りたいと思います。



サン・ボルハ病院における内視鏡トレーニング



サン・ボルハ病院スタッフによる送別会の様子

編集後記

本号でお知らせさせて頂きましたようにLACRCオフィスでは2名の医師の離任、現地病理医の勤務開始と慌ただしい毎日です。出会いと別れのこの時期、新任地での益々のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。また僭越ながら2月よりLACRCオフィスにて事務補佐を担当させて頂いております。今後LACRCオフィスの近況をご報告してまいりますので何卒宜しくお願い致します。

(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 17, March 2015

[発行日] 2015年3月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp



Viva! Chile!

日本は過ぎ易い春を経て徐々に蒸し暑くなってくる季節かと存じますが、地球の裏側に位置するチリは現在、秋になり、夏には青々していた木々も紅葉し、朝晩は非常に冷え込む季節となってきました。

そんな寒さを吹き飛ばすべく、本年6月11日より4年に一度の南米サッカーNo.1を決めるコパ・アメリカが開催しました。コパ・アメリカは1916年より始まった世界最古のナショナルチームによる大陸選手権大会で今回が44回目であります。過去6回チリで開催されているものの未だに優勝経験がなく(優勝経験がないのは、野球の国ベネズエラ、エクアドル、そしてチリの3か国のみです)、今回の自国開催にける思いが国中から伝わってきております。

実際、人々の話題もメディアもコパ・アメリカ一色で、至る所でチリのユニフォームや応援グッズが売られております。

開幕戦当日には、保育園(現地の保育園)から帰宅してきた息子・娘の顔にチリ国旗がペインティングされ、息子が「Chi-Chi-Chi, Le-Le-Le, Chile! Chile! Viva! Chile!」と保育士さんに教えてもらったチリを応援する歌を歌っていたり、開幕戦をテレビで応援するために皆が早く帰宅することでの渋滞が街中に発生したりと、まさに国民的行事と実感する出来事が身近にたくさん起こっております。

開幕戦はエクアドルに勝利し、街中からは歓喜の雄叫びが聞こえてきました。7月4日(現地時間)の決勝戦までチリが勝ち進み、念願の初優勝でチリ国全土が歓喜の輪で包まれることを願いつつ、巻頭文を締めさせていただきます。

小田柿 智之 LACRC 消化器病態学分野



コパアメリカのチリ代表選手



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

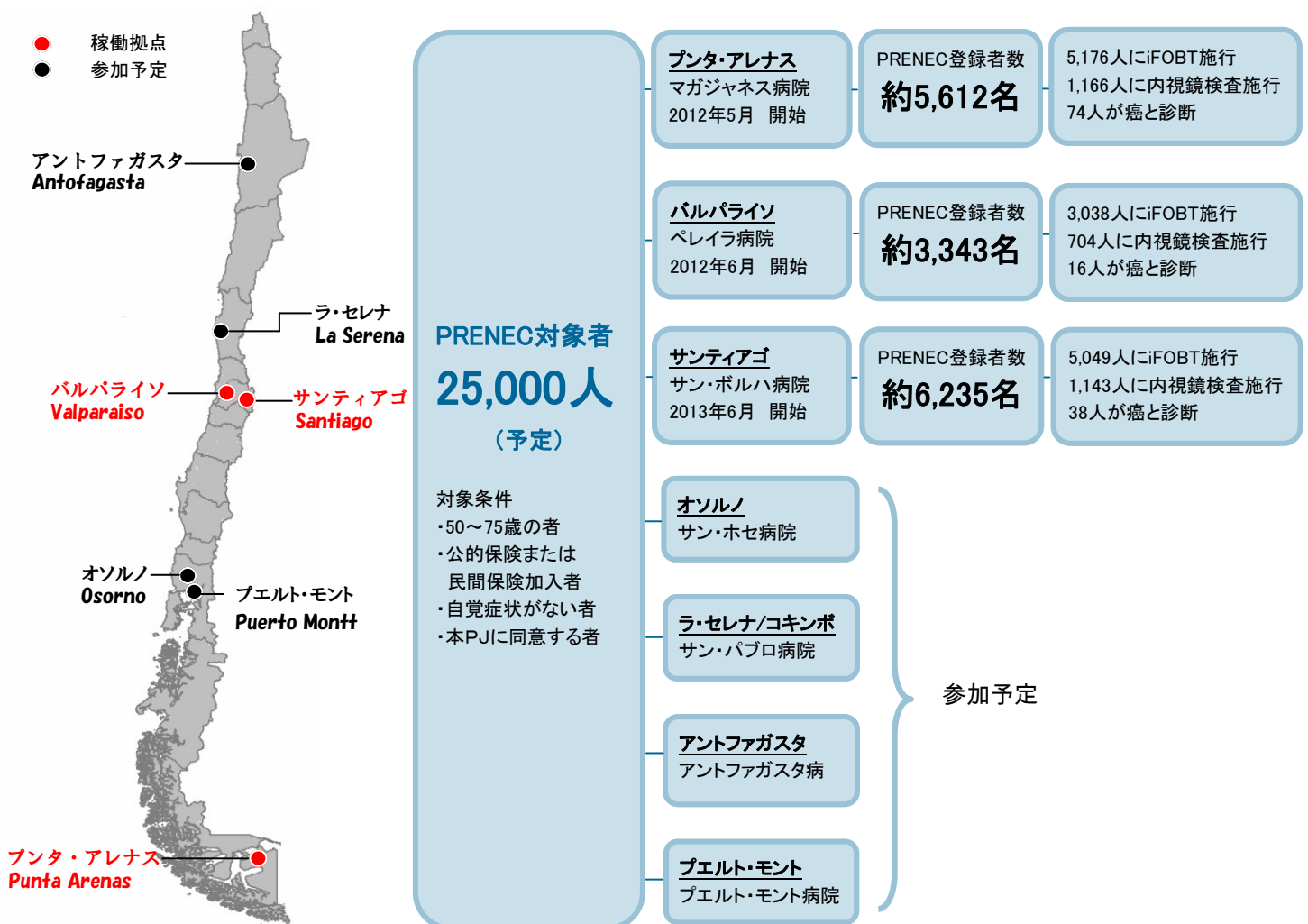
ご挨拶	1
PRENECの進捗状況	2
LACRC活動報告	5

PRENECの進捗状況

LACRCのメインミッションである大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。このプロジェクトでは、現在第5州バルパライソ、第12州プンタ・アレナス、首都州サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査(iFOBT)を用いた検診プログラムが進行中です。

PRENECの進捗報告

2012年より開始されたPRENECは現在までに3拠点(プンタ・アレナス、バルパライソ、サンティアゴ)が稼働しており、2014年に新たな3拠点の参加が見込まれていましたが各当局の準備が追いつかず待機状態となっております。しかしながら、今年2015年6月プエルト・モンテ、来月7月にはバルディビアにて講習会が開催され新たな参加が期待されています。



サン・ボルハ病院における内視鏡トレーニング

以前のニュースレターでもお伝えしているように、チリ国内では大腸内視鏡検査を施行できる医師が少なく、大腸癌検診を普及する上での課題の一つとなっております。この状況を改善すべく2013年10月よりサンティアゴ、サン・ボルハ病院にある日智消化器病研究所にて研修生を受け入れ、大腸内視鏡の挿入・診断・治療の指導を行ってきました。

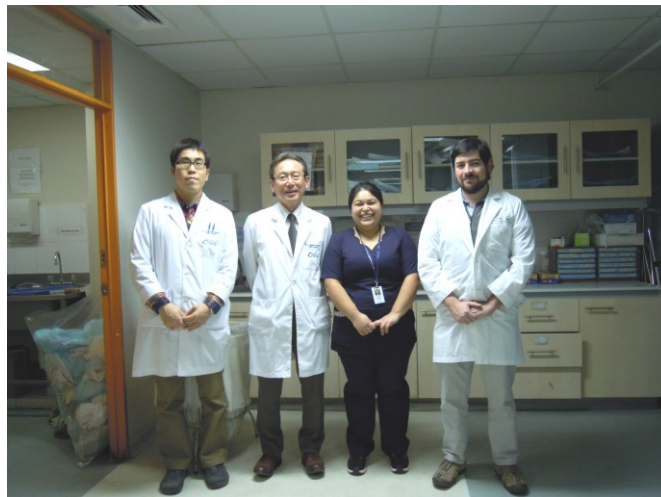
2015年6月現在、キハダ医師(2015年3～6月)、タピア医師(2015年6～8月)が研修を受講しており、LACRCの椿教授、小田柿助教により指導が行われております。

キハダ医師は内視鏡検査自体全くの初心者であったにもかかわらず、我々の指導に熱心に耳を傾け、研修に励んだこともあり、検査を完遂できるレベルにまで上達いたしました。研修終了後には、元々所属している病院に大腸内視鏡検査を導入するとのことです。

我々の活動により、チリ人内視鏡医が育っていくということは非常に喜ばしいことで、今後もチリ国内での大腸癌検診の一翼を担える人材の育成を目標に指導を行っていく予定です。



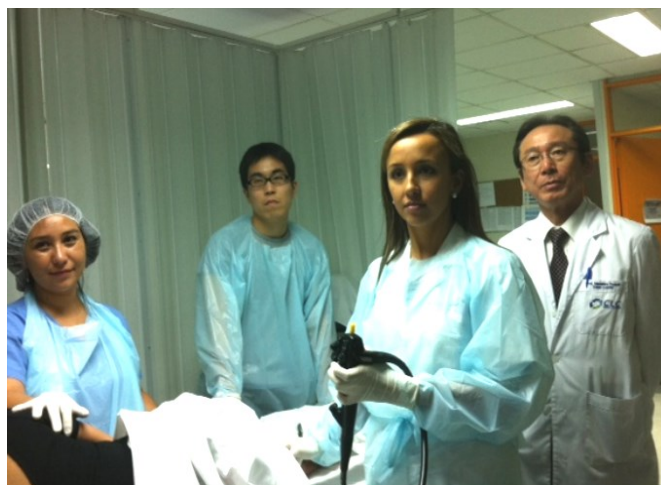
キハダ医師と記念撮影



PRENEC専任ジャスミン看護師とタピア医師と記念撮影



サン・ボルハ病院外観



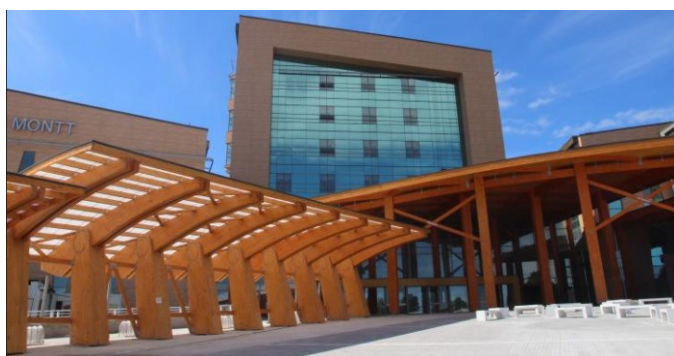
キハダ医師のトレーニングの様子

プエルト・モント市における講習会開催

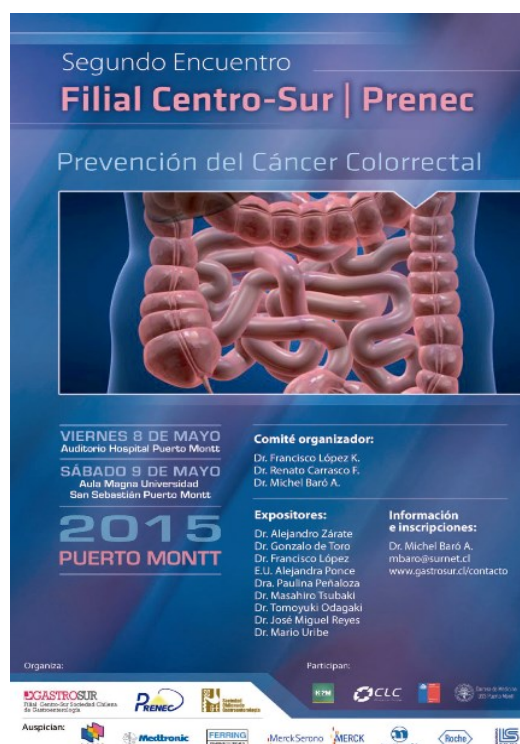
チリ南部に位置するプエルト・モント市はロス・ラゴス州(第10州)の州都でありチリ南部の海運、漁業、材木産業の中心地域です。ドイツ人の移民も多く、町にはヨーロッパの雰囲気が漂っています。

本年5月8日、9日の2日間にわたりプエルト・モント市内プエルト・モント病院、同市内サン・セバスティアン大学にてPRENEC参加に向けた講習会が行われました。講習会にはLACRCより椿教授、小田柿助教がCLCからはロペス医師、サラテ医師、ウリベ医師、レジェス医師、ペニャローサ医師、ポンセ看護師、タマラ栄養士が参加し、椿教授と小田柿助教はそれぞれ「日本における大腸癌の標準外科的治療」、「日本における大腸ESD治療」に関する講演を行いました。

また通例のように巨大な大腸模型をモール内に展示して一般市民を対象に早期発見・早期治療の大切さを呼びかけました。



プエルト・モント病院



講習会ポスター



椿教授講演発表の様子



小田柿助教講演発表

LACRC活動報告

客員教授任命証授与

本年5月、6月に、チリ大学よりククルジャン医学部長、同大学医学部オライアン研究技術科長、CLCよりゴイコレア理事代表、ロペス大腸肛門科長の4名の先生方を本学客員教授としてお迎えすることとなりました。

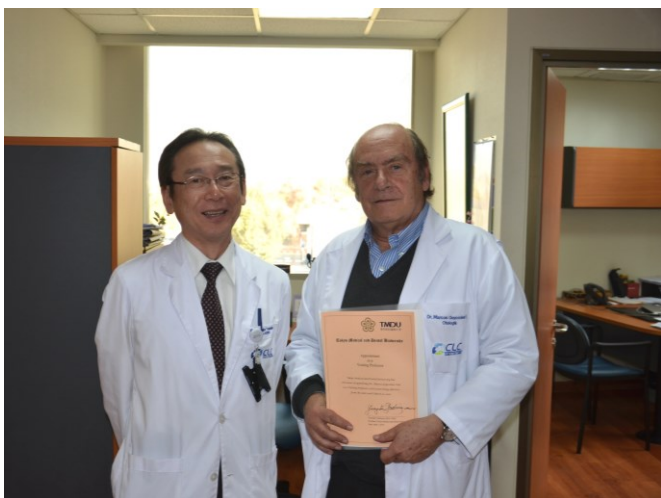
LACRC拠点責任者の椿教授より各先生方に任命証の授与が行われ、名誉な事と喜びのコメントをいただきました。今後もJDP(ジョイントディグリープログラム)開始に向けて順調にプロセスが進むことが期待されます。



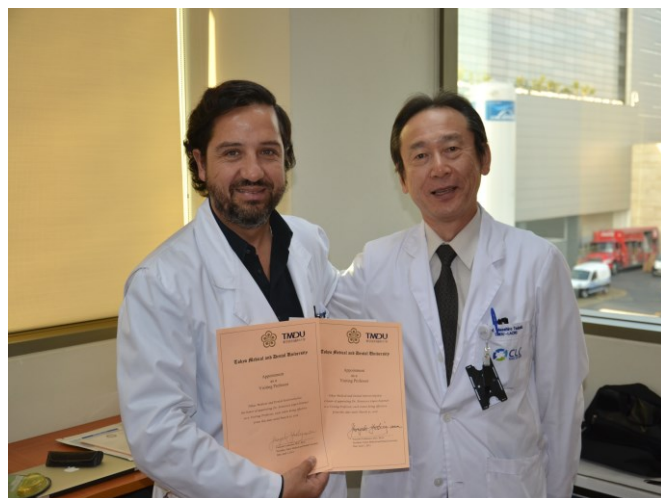
ククルジャン医学部長(チリ大学)



オライアン研究技術科長(チリ大学)



ゴイコレア理事代表(CLC)



ロペス大腸肛門科長(CLC)

在チリ日本大使館主催講演会開催

本年6月12日、チリ大学医学部において在チリ日本大使館主催の椿教授による日本とラテンアメリカの医学協力に関する講演会が開催されました。

当日は当地のデモの時期と重なり来場者の数が懸念されていたにもかかわらず、チリ政府関係者からチリ人医師、同大学医学部学生、サンティアゴ市内の大学生、現地在住邦人まで幅広い来場者が講演会に集まり、質疑応答の際には日本・チリ間の医療における共通点や違いなど活発な意見交換が行われました。

また講演後には同大学医学部オライアン研究科学技術長より本学とチリ大学のJDPの紹介もされ学生の関心を引くこととなりました。



講演会場のチリ大学医学部外観



左より椿教授、ソト衛生医学指揮海軍少尉、オライアン教授、ラニャガ医師



講演発表中の椿教授

編集後記

チリ首都圏では過去40年余りでこれほど降雨の少ない6月は珍しく、もともと盆地に位置している事も相俟って大気汚染による環境非常事態が16年ぶりに発令されました。これにより車両規制を受けLACRCスタッフの生活や業務に影響が出ることも少なくありません。日本では梅雨の頃かと思われませんが、大気の汚れを一掃すべくサンティアゴにも一日も早く雨が降るよう切望しております。今後も本Newsletterを通してLACRCの活動を報告して参ります。(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 18, June 2015

[発行日] 2015年6月30日
[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

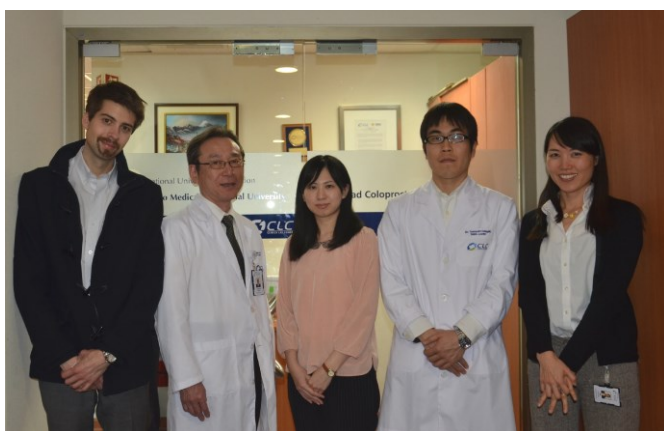


春の訪れ～出会いと別れ～

日本は蒸し暑い夏が終わり、徐々に肌寒くなってきた頃かと思います。一方、地球の裏側に位置するチリでは冬が終わり、徐々にですが暖かく過ごしやすい季節となりました。特にサンチアゴでは冬の間はスモッグに悩まされましたが、春の訪れとともに、春一番なのでしょう、風がスモッグを一掃し、清々しい空が広がるようになってきました。街中の至る所に新芽や花々が見られるようになり、特にアーモンドやシルエラの花は、バラ科サクラ属ということもあって、日本の桜に非常によく似ており日本人に春の到来を感じさせてくれます。

日本では、年度を跨ぐということもあり、春は出会いと別れの季節でもあります。LACRCに於きましても、9月から事務の山中結衣係員が3ヶ月の研修のため来智し、そして、10月初旬に椿昌裕教授が1年間のLACRC勤務を終え帰国となりました。椿昌裕教授は、PRENECでの臨床面の活動のみならず、5年目を迎えたLACRCでの日本人医師の在り方、JDP開始へ向けての日本とチリとの連携など、環境整備や交渉の面においても御尽力頂きました。LACRC一同を代表し、椿昌裕教授に感謝の念を込めつつ、巻頭文を締めさせていただきます。

小田 柿 智之 LACRC 消化器病態学分野



左よりウレホラ氏、椿教授、山中係員、小田柿助教、早川氏
(チリの“桜”、アーモンドとシルエラの花とともに)



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENECの進捗状況	2
活動報告	4
Staff	8

PRENECの進捗状況

LACRCのメインミッションである大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。このプロジェクトでは、現在第5州バルパライソ、第12州プンタ・アレナス、首都州サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査(iFOBT)を用いた検診プログラムが進行中です。

プンタ・アレナスにおけるPRENEC三周年記念式典

2012年に開始されたプンタ・アレナスにおけるPRENECが三周年を迎えたことから本年7月に記念式典が行われました。式典では記念行事として椿教授より「日本の地域病院における大腸癌検診の実績」、小田柿助教より「日本における大腸ESD治療」の発表が行われました。

また、この式典に先行し、椿教授が数日前から現地入りし、現地病院では対応困難な症例の大腸内視鏡検査・治療の実践・技術指導が行われました。



左よりカロロビッチ医師、ロペス医師、椿教授、小田柿助教



マガジャネス病院のスタッフと記念撮影



椿教授による技術指導の様子



式典での講演の様子

バルディビア市における講習会

バルディビアはチリ南部ロス・リオス州（第14州）に位置した人口約14万人の都市です。1850年代以降に入植者を受け入れた背景から街や建物よりドイツ文化を感じられます。

7月3日、バルディビア市バセ・バルディビア病院においてPRENECに関する講習会が行われました。LACRCより小田柿助教が参加し「日本における大腸ESD治療」に関する発表を行いました。新たな候補地としてPRENECへの参加が期待されます。



バルディビア市で有名なカジェカジェ川



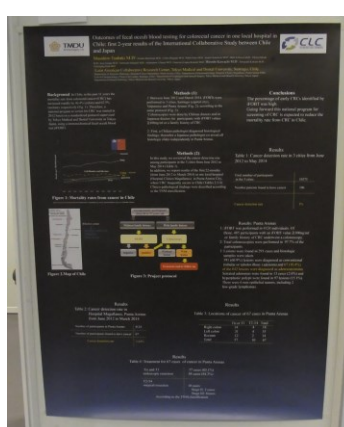
左より小田柿助教、ソト保健省副大臣補佐官、ロペス医師、アベンダニョ医師

17th World Congress on Gastrointestinal Cancer にて発表

スペイン・バルセロナで本年7月1日から4日まで開催された17th World Congress on Gastrointestinal Cancerにて椿教授がPRENECに関するポスター発表「The outcomes of the fecal occult blood testing for colorectal cancer in one local hospital in Chile: results of a first two-year international collaborative study between Chile and Japan」を行いました。



バルセロナ市の街並



学会におけるポスター発表の様子



第三国研修

本年8月17日より5日間にわたりJICA・AGCI（チリ国際協力庁）共催にて第三国研修が開催されました。この取り組みは本学とチリ保健省、CLCの間で進められてきたPRENECをさらに南米の支援が必要とされる国へ普及させるという計画です。今年が第1回目の開催となり、エクアドル、コロンビアからの各医療チームが研修国として参加しました。LACRCスタッフの他に、横浜市立みなと赤十字病院病理部長である熊谷二郎医師、本学の伊藤崇助教がJICA専門家として招聘され、CLC、サン・ボルハ病院にて多岐にわたる指導にあたりました。開講式では日本・チリ双方の政府関係者にご出席いただき、本学の取り組みの重要性を強調されました。



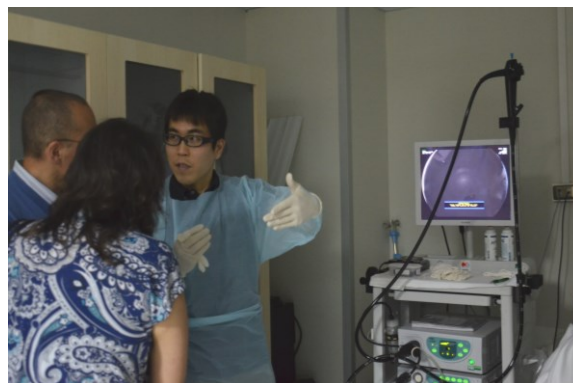
熊谷病理部長による講義の様子



伊藤助教の講義風景



ディスカッション時の樫教授



小田柿助教による技術指導の様子



サン・ボルハ病院の施設見学



研修参加者との記念撮影

LACRC活動報告

日智商工会議所における邦人向け講演会

日智商工会議所は1980年に設立されて以来、現在までに日本・チリの企業を合わせ70社以上の会員を擁し、さらに日本政府機関、学術機関も参加するチリの日系社会において影響力のある大きな非営利団体です。

この度日智商工会議所長中村氏の依頼により7月14日椿教授が講演を行いました。1980年代から続くラテンアメリカにおける本学の医療技術支援の紹介に加え、大腸癌に関する講義も行い、参加者との活発な討論が行われました。



講演の様子



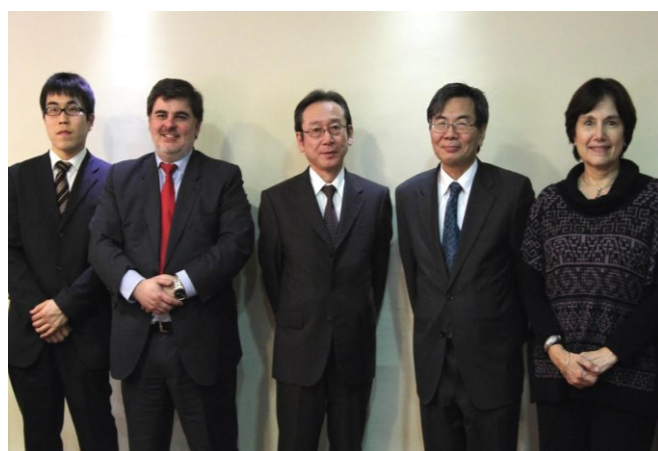
講演終了後、日智商工会議所長中村氏より記念品贈呈

チリ保健大臣表敬訪問

今年1月のチリ保健大臣交代に伴い、在チリ日本大使館の要請により8月26日、カステージョ保健大臣への表敬訪問を行いました。

日本大使館より二階大使、山口書記官、JICAより小林所長代理、LACRCからは椿教授、小田柿助教、CLCよりロペス医師、サン・ボルハ病院からエステラ医師が参加しました。椿教授から本学における1980年代から現在に至るまでのチリへの医療協力の歴史、PRENECにおけるLACRCの具体的な活動及び成果に関して説明が行われました。

保健大臣は本学の活動に対する感謝の意を表明されました。



左より小田柿助教、ブラウズ副大臣、椿教授、二階大使、カステージョ保健大臣

ラ・セレナにて国際学会及び講習会開催

昨年も開催された北カリフォルニア大学主催のPRENEC講習会が今回は第1回消化器国際学会として開催され、海外招聘者としてアメリカ合衆国のJohns Hopkins Hospitalの医師らと共にLACRCスタッフが参加しました。

椿教授は「結腸・直腸癌における日本の標準外科治療」、小田柿助教は「大腸内視鏡診断」に関する講演を行いました。



左より椿教授、ハーベルレ北カリフォルニア大学医学部長、プレスキー医師



記念品贈呈の様子

エクアドルとの第4回国際シンポジウム

2012年に本学とエクアドル政府保健省の間において、大腸癌検診プロジェクト協力に関する覚書を締結しており、拠点病院であるキト・国立パブロ・アルトゥロ・スアレス病院において大腸癌検診プロジェクトが進められています。また本学は覚書に基づいて年に1回、エクアドル保健省と共催で消化管に関するシンポジウムを開催しております。9月15日には第4回のシンポジウムが行われました。今回初めての試みとしてテレビ会議システムを使用して椿教授、小田柿助教が講演を行いました。エクアドルの多くの参加者との活発な討論が行われました。



椿教授とシンポジウム参加者(画面内)



小田柿助教による講演の様子

内視鏡講習会

8月26日から3日間にわたり南米の医師を対象とした内視鏡ワークショップがCLC主催のもと開催され、LACRCより椿教授、小田柿助教が演者として招かれました。ブラジル、ウルグアイ、アルゼンチン、ペルー、ボリビアから研修者が参加しました。

初日は椿教授より「早期大腸癌スクリーニング」、小田柿助教より「上部消化管内視鏡の注意点」の講義、翌日はシミュレーターを用いた技術指導が行われ、参加者は熱心に取り組んでいました。今後もこのような活動を通して南米の医師への指導を行っていきたいと思います。



内視鏡講習会の様子



研修者とともに記念撮影

チリ大学附属病院にて内視鏡実演

9月15日に椿教授、小田柿助教がチリ大学附属病院内にて、内視鏡の実演を行いました。当日は病院内の多くの医師が見学につめました。



内視鏡実演の様子



チリ大学附属病院前にて

Staff

昨年10月に着任されて以来、多くのチリ人医師への大腸内視鏡技術指導に加え、チリ拠点の体制の整備や、JDP(ジョイント・ディグリー・プログラム)の開始に向けた調整や交渉に御尽力いただきました椿昌裕教授が任期満了にて2015年10月離任されることになりました。

離任挨拶

椿 昌裕 東京医科歯科大学チリ拠点 特任教授

昨年9月26日着任から1年間の任期終了に当たり、ご挨拶させていただきます。

私は前回派遣時(1994年1月～12月)には外科医として、今回は大腸内視鏡指導を主体に活動して参りました。指導に於いては日本での経験を活かし、可能な限り研修生に内視鏡操作をさせるよう心がけ、体位変換や挿入方向を口頭で指示しました。任期中に指導したPRENEC研修生は勿論、サン・ボルハ病院研修生らも3ヶ月間の研修期間終了時には、簡単な症例はほぼ10分以内で全大腸内視鏡検査を行えるようになり、ある程度の成果を達成しつつあると実感しております。

また伊藤先生、河内先生、岡田先生のご尽力により3編の論文が完成し、2編は既にacceptされ、私も本年7月バルセロナで開催された17th World Congress of Gastrointestinal CancerでPRENECの成績を発表する機会を得、本プロジェクトは世界に認知されつつあります。

私は外科医、特に直腸癌に対する自律神経温存手術の適応と成績をテーマに研鑽して参りましたので、国内・国際学会で発表して来たデータを元に、サンチャゴを始めとした各都市やエクアドルで講演を行う機会にも恵まれました。講演終了後、開腹手術に於ける側方郭清の手技や自律神経温存手術術式分類、大腸癌取り扱い規約(リンパ節分類方法)などに大変興味を示すチリ若手外科医や学生らと会談しますと、日本人の特性(患者因子を含めて)を活かした手術術式・手技を絶やす事無く後世に継承する努力を、帰国後も継続すべきであると再認識しております。

2016年4月からは日本とチリとの長い交流の歴史を経て、本学

とチリ大学間でのJoint Degree Program(JDP)が新たに開始されます。チリ拠点設置以来、8名の医師、1名の研究員がチリ国内外で様々な活動を行って来ました。それぞれの活動がJDPの成功に役立つ事と確信しております。

最後に公私ともに私を支えて下さった、河内先生、岡田先生、小田柿先生、小林研究員、ハイメさん、早川さん、山中さん、多数のチリ人友人達、また2度にわたるチリ赴任を快諾し同行してくれた妻に、心から感謝し離任の挨拶と致します。



送別会にて

編集後記

チリに到着してからというもの常に人々の温かさを感じており、マイペースではありますが徐々に慣れ、チリ生活を満喫しています。また日本でもニュースになっていた9月16日のチリにおける地震ですが、大きな揺れにも関わらず幸いサンチャゴでは甚大な被害もなく通常どおりの生活をしております。9月から11月までの短い研修ではありますが、拠点の一員として情報を提供してまいります。

(学務部学務企画課ジョイント・ディグリー係 山中結衣)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 19, September 2015

[発行日] 2015年9月30日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 20 December 31 2015

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

特別寄稿

「ジョイント・ディグリープログラム調印式出席にあたり」

東京医科歯科大学(以下、TMDU)とのジョイント・ディグリープログラム(以下、JDP)を構築する中、私は様々な貴重な経験をすることができました。

まず、我々のカウンターパートであるTMDUと、JDPの基本概念から逸れないよう細心の注意を払いながら取り組んできたこれまでの作業は、今までに経験したことがないほど慎重なものでありました。

この一年半の間、毎月開催されるテレビカンファレンスや3度にわたるチリ及び日本での会談を通して、特に、北川昌伸教授(友情の意を込めて我々はマサと呼んでいます)とは深い信頼関係を構築することができました。

このプロジェクトの重要性を理解し、学術的・経営戦略的な数々の問題に対し、解決に向けて揺るぎない支援を続けてきたチリ大学諸機関(学長室、医学部長室、大学院執行部)、そして、2007年からTMDUとの関係を築き上げてきたフランシスコ・ロペス医師率いるクリニカ・ラス・コンデス(以下CLC)の大腸肛門科チーム、CLCアカデミック部門及びCLC経営陣、そして何となく我々のカウンターパートであるTMDUの執行部、特に日本側においてJDP推進の礎を築いてくださった大山喬史前学長及び吉澤靖之現学長、江石義信医学部長と、同じ目標を持つ全ての方々の支援を受け足並みを揃えることができました。

これまでの期間に培ってきた経験は、チリ大学の未来を描くうえで実に価値のあるものになると確信しております。

チリ大学医学部国際交流課部長 ミゲル・オリアン教授



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

特別寄稿	1
JDPプログラム	2
PRENECの進捗状況	4
学生ポスター受賞	7

ジョイント・ディグリープログラム

国立大学法人東京医科歯科大学は、海外の大学と連携し共同で大学院教育を行い、連名で一つの学位を授与するジョイント・ディグリープログラムを開設します。このプログラムは、文部科学省により平成27年6月15日付けで日本で初めて設置が認められたことから、平成28年4月からチリ大学、平成28年8月からチュラロンコーン大学と、それぞれ大学院博士課程においてジョイントディグリーの専攻を立ち上げ、学生受入れを開始いたします。

ジョイント・ディグリープログラム調印式

「ジョイント・ディグリープログラム開設に関する協定」を締結するにあたり、本学の国際化における取組について国内外に広く情報発信することを目的として、チリ共和国、タイ王国の関係者を本学に招き、合同調印式及び記者会見を開催いたしました。

本調印式には、本学、チリ共和国からチリ大学とクリニカ・ラス・コンデス病院、タイ王国からチュラロンコーン大学の関係者、及び来賓として在東京チリ共和国大使館ベッカー公使参事官、在東京タイ王国大使館タンサクン公使、文部科学省常盤高等教育局長をはじめ多くの方々にご臨席賜り、つつがなく執り行われました。

当該プログラムは、グローバル人材育成の観点から、国際的リーダーに成り得る高度な専門的医療人、すなわち臨床医学・医療の本質を理解したプロフェッショナルであると共に研究者としての視点・資質をも有する人材育成を目的として開設されました。本学が「世界に冠たる医療系総合大学」を目指し、更なるグローバル化の推進を図る上での一助となり、また本学と関係各機関との更なる相互発展が期待されます。



ジョイント・ディグリープログラム開設に関する協定 合同調印式 於：東京医科歯科大学 平成 27 年 11 月 26 日



調印式の際、両大学学長とCLC、来賓の方々と記念撮影



吉澤学長を囲んでチリ側関係者と記念撮影



挨拶をする本学吉澤学長



調印式における会談の様子



チリ大学ピバルディ学長によるスピーチの様子



CLCのCEOグレベ氏によるスピーチの様子

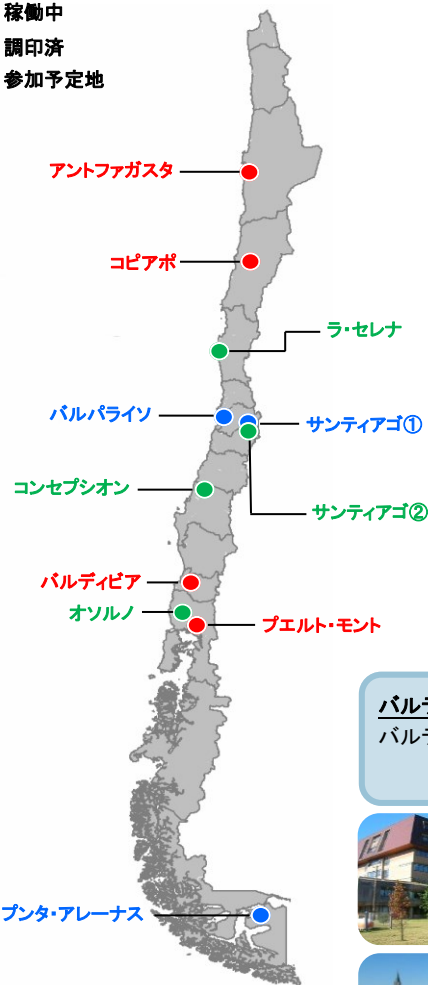
PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。現在、バルパライソ、プンタ・アレナス、サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査(iFOBT)を用いた検診プログラムが進行しておりますが、今年11月にサンティアゴのチリ国立がん研究所が拠点施設として正式にプロジェクトに参加する協定が同施設とCLC間で結ばれました。

さらに、来年3月からコンセプシオンのグラント・ベナベント病院にてPRENECの開始が決定しており、チリ全土への拡大にむけて前進しております。

新たな拠点病院を増やし、大きく前進

- 稼働中
- 調印済
- 参加予定地



プンタ・アレナス ●
マガジャネス病院
2012年5月 開始

バルパライソ ●
ペレイラ病院
2012年6月 開始

サンティアゴ ● ①
サン・ボルハ病院
2013年6月 開始

コンセプシオン ●
グラント・ベナベント病院
2016年3月 開始予定

サンティアゴ ● ②
国立がん研究所
2016年3月 開始予定

オソルノ ●
サン・ホセ病院
2014年1月 調印

ラ・セレナ/コキンボ ●
サン・パブロ病院
2014年1月 調印

バルディビア ●
バルディビア病院

プエルト・モント ●
プエルト・モント病院

コピアポ ●
サン・ホセ・デル・カルメン病院

アントファガスタ ●
グスマン病院



バルパライソにおける記念式典

2012年に開始したバルパライソでのPRENECが3年目を迎え、さらなる強化を目指し11月17日ペレイラ病院にて記念式典が開催され、LACRCより小田柿助教、山中係員が出席しました。、その他政府関係者も出席する中、本学の支援に関し感謝の意が示されました。

また、現地医師では治療困難なPRENEC患者が40件以上も待機していることから、今後小田柿助教がバルパライソで指導・援助にあたることとなり、早急な実現に向けて式典後に同病院にて入念な施設見学及び打ち合わせが行われました。



Me gusta Compartir Tweet

18 de noviembre de 2015

Lanzan campaña anual preventiva de cáncer de colon y recto en la Región de Valparaíso

保健省ホームページ掲載写真

「バルパライソにて毎年恒例大腸直腸癌予防キャンペーン始動」



ペレイラ病院における施設見学・打ち合わせの様子

チリ国立がん研究所、PRENECへ正式参加



握手を交わすグレベCEOとセルダ所長

Instituto Nacional del Cáncer（チリ国立がん研究所）がPRENECの拠点施設として正式にプロジェクトに参加する協定が本年11月30日、同施設とCLC間で締結されました。

CLCよりグレベCEOとロペス医師、チリ国立がん研究所よりセルダ研究所長、ストック内視鏡センター長、カブレラ看護師が出席されました。

2016年3月の開始に向けて同年1月にはPRENEC研修会が開催される予定です。

内視鏡講習会

12月17日から3日間にわたり中南米諸国の医師を対象としたCLC主催の内視鏡ワークショップが開催されました。チリだけでなく日本（麻生飯塚病院赤星先生、池田先生）やブラジルからも講師が招かれました。LACRCからは小田柿助教が参加し、「大腸内視鏡検査における注意点」に関する講義を行いました。また、ブタの胃を用いた内視鏡治療（ESD）のハンズオン（Hands-on）においてもインストラクターとして技術指導を行い、参加者は熱心に取り組んでいました。今後もこのような活動を通して中南米諸国の医師への指導を行っていきたいと考えています。



小田柿助教による発表の様子



小田柿助教による内視鏡指導の様子

PRENEC論文が国際科学誌Cancerに掲載



学術誌Cancerオンライン版掲載記事より

本年10月、国際的な学術誌Cancer(キャンサー)に前赴任者である岡田卓也助教が、PRENECに関する論文「International collaboration between Japan and Chile to improve detection rates in colorectal cancer screening」を発表しました。

この論文では、2012年から2014年にPRENECで施行した大腸癌検診の結果と本学教員の指導効果を検討しました。

チリ人のみで施行した過去の大腸癌検診結果と本学が協力しているPRENECの結果を比較すると、大腸内視鏡検査の検査完遂率や大腸ポリープ・がんの発見率が大幅に改善され、がん発見率に関しては約5倍となりました。本学教員の指導が検査診断技術の大幅な向上に寄与したと考えられます。

11月26日にはチリ大学とのジョイント・ディグリープログラム調印式の際に本論文に関するプレスリリースが行われました。

(リンク先<http://www.tmd.ac.jp/archive-tmdu/kouhou/20151125.pdf>)

2014年度プロジェクトセメスター学生 ポスター受賞

本年10月に開催された第37回チリ泌尿器科学会にて、2014年度プロジェクトセメスター学生、CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室に所属していた松本惇奈さんの研究テーマ「Detection of gene polymorphisms and the relationship with serum level of prostate specific antigen in Chilean patients」がポスター賞(共同受賞)第二位に選ばれました。

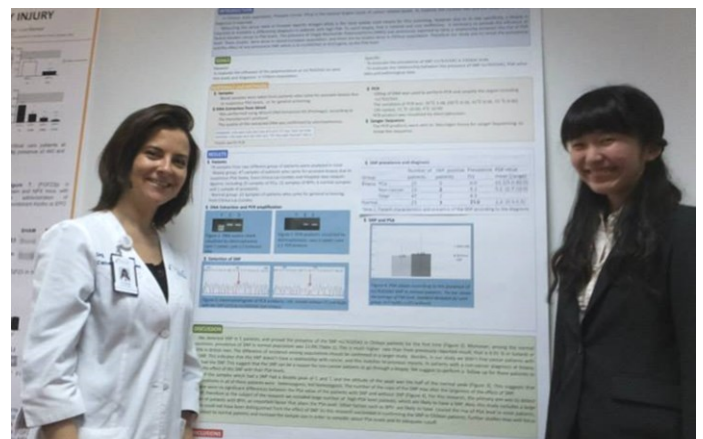
チリ泌尿器学会でのポスター受賞によせて
医学科5年 松本惇奈

私は2014年度、プロジェクトセメスターの期間中にクリニカ・ラス・コンデスの泌尿器科において、サンチェス先生のもと前立腺癌のマーカーであるPSAの値に変化を及ぼしうる遺伝子変異についての研究をしていました。

今回、わたしが携わった研究、Detection of polymorphisms related to seric PSA level in Chilean patientsが、チリの泌尿器学会でsecond place posterとして受賞したとのことで、とても喜ばしく思うと同時に、一部の研究を行ったことで名前を入れていただいたことを光栄に思います。資源の制限等はありませんでしたが、サンチェス先生は英語も堪能でディスカッションもしやすく、なにより研究室はこうして私を一員として扱ってくださる暖かい雰囲気の研究室でした。

チリでの半年間は私の考え方へも強く影響を及ぼし、人生の転機ともなり得る経験でした。チリ留学は価値観を一度壊され、視野を広げることができる、またとない、そして医科歯科でしかできない機会だと思います。

後輩にもぜひこの機会を活用してほしいと思っています。



チリでの最終発表の様子、担当教官サンチェス先生と



研究の様子

編集後記

早くも年の暮れとなりましたがチリでは1月から2月までの間バケーションシーズンに入ります。クリニカラスコンデス(CLC)ではこの時期を利用して、この度外来診療部門の整備目的で各部署の大幅な引越しをすることとなりました。これにより当LACRCオフィスもCLC内EDIFICIO AZUL地下一階へ移転の予定です。新しい年、新しい環境で気持ち新たに今後もLACRCの近況を報告して参りますので、引き続き、ご愛読の程宜しくお願い致します。(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 20, December 2015

[発行日] 2015年12月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp